

## &lt;資料紹介&gt;

## マルクスの人間論と動物論

—人間主義か自然主義か—

テッド・ベントン 著  
山口拓美 訳(※訳注)

この章では<sup>1</sup>、現代社会主義思想において最も重要で影響力のあるテキストの1つ、マルクスの1844年の『経済学・哲学草稿』（『パリ草稿』と呼ばれることもある）に焦点を当てる。このテキストを纏め上げている中心概念は類的存在と疎外であるが、マルクスがこれらの概念を人間本性と動物本性の根本的対立という観点から発展させたという事実を重視する論者はほとんどいなかった。この対立は『草稿』におけるマルクスの思惟にとって極めて重要なものであって、彼の私有財産制に対する倫理的告発と共産主義の未来の擁護は全体としてこれにかかっている。実際、資本主義的私有財産は、人間を動物状態へと引き下げるその傾向のために有罪を宣告されているのである。

動物自身が倫理的虐待に対して脆弱かもしれないという考えは、初期マルクスの哲学思想の「人間主義的」側面と整合させるのが困難であるように見える。他方、後に示すように、マルクスのテキストは人間本性の自然主義的（還元主義的ではないが）見地に賛成する仕方では哲学的観念論に対する反対を明確にしている。人間は動物と対比されるとともに、動物と一緒に「活動的な自然存在」として理論化されてもいる。マルクスは自らのテキストを人間主義と自然主義のジレンマと見なしているが、私は人間主義と自然主義の論議が互いに未解決の緊張状態の中で共存していることを示唆するつもりである。本章の目的は、この初期のテキストにおいて比較的軽視されてきたマルクスの自然主義的側面を発掘し擁護することである。人間本性のこの自然主義の見地は、適切に修正、彫琢されて、本書の後の諸章での議論の土台を形作ることになる。

政治的エコロジーとアニマル・ライツの立場は、人間以外の存在の倫理的意義を主張する点で共通している。これらのパースペクティヴは、すべてではないが幾つかの異説において、その倫理的重要性を、人間以外の種や自然状態やエコシステムの人間福利にとっての重要性に関するいかなる要求からも全く独立に主張する。それにもかかわらず、これら2つの立場は一般に、人間は共通の性質および生活の諸条件を他の種と共有しているという人間観、また、人間は生態学的な相互依存性の絆の中で他の種と結び付いているという人間観を包含している。人間は、自然から離れたもの、自然に対立するものというよりはむしろ、より広大な自然秩序の一部として理解されることになる。

はじめのうちは、少なくともこれらのパースペクティブと『草稿』のマルクスによって採用されているそれとの間には多くの共通点があるように見える。例えば、人間の「非有機的<sup>・</sup>身体」というマルクスの印象的な自然のメタファーを考えてみよう。

自然、すなわち、それ自体が人間の肉体でない限りでの自然は、人間の非有機的<sup>・</sup>身体である。人間が自然によって生きるということは、すなわち、自然は、人間が死なないためには、それとの不段の「交流」過程のなかにとどまらねばならないところの、人間の身体であるということなのである。人間の肉体的および精神的<sup>・</sup>生活が自然と連関しているということは、自然が自然自身と連関していること以外<sup>・</sup>のなにごとをも意味しはしない。というのは、人間は自然の一部だからである。<sup>2</sup>

マルクスはここで、ただ単にシャロー-エコロジー的な、啓蒙された種の自己利益を述べているのでは決してない。『草稿』全体にみなぎる共産主義観は、人間の真の実現と不可分のものとして、自然への適切な倫理的、美的、認知的<sup>・</sup>関係に中心的な位置を与えている。より後の作品では、マルクスはあたかも、人間の実現がそれによって可能となる単なる主要な歴史的手段としての人間性と自然の対立の克服という見解に後退したかのように見えることがある。これはまさにジェラルド・コーエンが非常に影響力の大きなマルクス歴史理論の擁護の中で論述した類のマルクス論である。<sup>3</sup>しかし、これに反して『草稿』のマルクスは、自然への関係の転換が人間解放の過程それ自体の重要な側面であり内容であることを明確に認識している。

実際、このことが、マルクスが『草稿』で到達した基本的な洞察として私が保持したいと考えているところのものである。しかし、——そしてこれが本章の以下の部分の論題となるのであるが——この問題領域に関係することとなると、初期マルクスが採用している全般的な哲学的立場の中には基本的な曖昧さと緊張があるように思われる。この曖昧さと緊張はマルクスが到達した洞察の価値あるものを蝕む恐れがあり、そしてこれらが、環境的<sup>・</sup>価値と鋭く反目するマルクス読解を支えてきたのである。初期マルクスの最も基礎的な哲学的アイディアと議論の「合理的<sup>・</sup>核心」が抽出されるべきであるならば、これらを再構築し再評価する真剣な作業が必要である。

『草稿』の議論には、上記引用文の自然主義と、そしてその「ディープ-エコロジー的」な読解の可能性と、非常に相性が悪いように思われる2つの要素がある。それは第1に、私有財産制の下での労働疎外の倫理的批判においてマルクスが中心的装置として用いる人間／自然対比であり、第2に、マルクスが「自然の人間化」を含むものとしての人間解放論に与える特別な内容である。私はこれらのうち、第2の要素については、これをむしろ未展開のまま残しておき、主に第1の要素について論ずることとしたい。<sup>4</sup>

人間／自然対立については、議論は大まかにいって次のようなものである。マルクスによれば、労働疎外は人間、人間相互の関係、および人間の外的、物質的<sup>・</sup>世界への関係に破滅的な影響

を及ぼすことになる。この破滅的影響は次のように要約できる。すなわち、労働疎外は人間生活を、人間以外の動物に相応しいような状態へと引き下げ、人間生活の中で人間と動物の関係を逆さまにする、と。疎外の克服は、人間に、適切な人間的状態を取り戻すこと、人間相互の関係および人間以外の自然との関係を取り戻すことを意味する。

しかし、人間以外の自然とは何か。それは他の動物を含むのであろうか。マルクスが「非有機的身体」というメタファーを用いていることは、そうでないことを示している。他方、動物が含まれないならばメタファーは維持されえないことに関してマルクスは何も語っていない。他の生命形態に媒介されずに非有機的自然の諸力および諸機構に依存する人間生活というものはいない。それが可能であるとマルクスが実際に考えていたと考える理由はない。ある人々は他の動物の消費あるいは搾取利用に頼らない満足のゆく人間生活の可能性が今や存在すると論じているが、それにもかかわらず、1844年に記された「人が自然によって生きる」という句は、その論及範囲の中に、全領域の動物利用、すなわち農業および工業の労働過程におけるエネルギー源としての、また食料、娯楽、愛玩のための動物利用を含んでいたにちがいないのである。

マルクスにとって人間解放が、人間以外の自然へのわれわれの関係の質的転換、自然の「人間化」を含むのならば、また自然が人間以外の動物種属を含むのならば、人間解放は人間以外の動物へのわれわれの関係の転換を含まなければならない。しかし、この転換はどのようなものでありうるのか。品種改良（あるいはわれわれにとっては遺伝子工学?）によって動物を人間に変えるという意味での文字通りの動物の人間化であろうか。あるいは、それ以外の自然と同様に、人間の諸目的をよりよく達成するための動物の性質の意図的な変更（すなわち、農用動物をより生産的で従順に、ペットをより「家庭的」で懐きやすく子供のような外見に変えてきた従来の繁殖と育種の継続）であろうか。もしこれらのうちの何れかがマルクスによって意図されていたのであれば、人間の自然からの疎外の批判はその説得力をすべて失うことになるであろう。これら何れかの意味での（自然の一部としての）動物の「人間化」は、資本主義の下での、そしてまた資本主義以前の社会における動物の取り扱いの継続と増大であって、その超克ではない。

これに加えてマルクスは、資本主義的生活様式の倫理的批判を基礎付ける際、人間と動物の間の暫定的で歴史的に超克可能な対立ではなく、絶対的で普遍的な対立について描写している。人間が動物状態へと引き下げられることがこの社会の欠陥であるならば、資本主義の超克は、人間に人間性を取り戻すことにおいて、同時に人間と動物との間の差別化を回復するのである。本質的に人間と動物を差別化しないのが資本主義の欠陥であるならば、資本主義の矯正手段は適切な差別化を回復しようとするものでなければならない。しかし、これはまさに「人間化」の概念が拒否しているように見えるところのものである。資本主義の倫理的批判（それは疎外概念の中に埋め込まれている）の存在論的基礎は、その超克の首尾一貫した定式化（特に自然の一部としての動物との関係における「人間化」の概念）と矛盾しているように見える。後に示すように、このジレンマは『草稿』の存在論を修正すること——にもかかわらず資本主義社会の倫理的批判

の大部分を無傷のまま残す——によって解決される。しかしながら、この作業に移る前に、このジレンマの源泉をより立ち入って調べてみることに、特に、マルクスが人間と動物とを対比する際の仕方についてその含意の幾つかを見ておくことが有益である。

## 類的存在としての人間

マルクスの人間本性論の中心をなすものは、人間が類的存在であるという主張である。この用語はフォイエルバッハに由来するものであるが、マルクスはこれに新しい、より豊かな哲学的意味を付与している。

人間は1つの類的存在である。というのは、人間は実践的にも理論的にも、彼自身の類をも他の事物の類をも彼の対象にするからであるが、そればかりではなくさらに——そしてそのことは同じ事柄にたいする別の表現にすぎないが——さらにまた、人間は自己自身にたいして、眼前にある生きている類にたいするようふるまうからであり、彼が自己にたいして、1つの普遍的な、それゆえ自由な存在にたいするようふるまうからである。<sup>5</sup>

人間の理論的で実践的な活動のこの「普遍性」が人間を（他の）動物から区別する。他の動物の知覚力、認知力、対象変形力は「直接的な肉体的欲求の支配の下で」行使される。動物は種属の「規準と欲求とにしたがって」生産する。これと対照的に人間は、あらゆる種属の規準に従って生産すること、直接的な肉体的欲求からの自由の下でのみ真に生産することを知っているのであり、自然界全体を実践的、審美的、認知的諸力の対象として受け取るのである。

動物は自分自身の欲求を満たすために生産するのに対し、人間個々人の活動は、少なくとも潜在的には、全体としての種属の活動の一部である。であるならば、人間の活動は自然界全体をその対象として受け取るという意味で「普遍的」であるだけでなく、それが一種属全体の活動であるという意味においても普遍的である。各個人の活動は、その型の単なる一例ではなく、相互に関連し合う全体の生きた一部分であり、その種属の活動、あるいは「生活」である。

労働疎外概念の説明の際に、マルクスはこの側面を大いに強調している。

疎外された労働は人間から、(1) 自然を疎外し、(2) 自己自身を、人間に特有の活動的機能を、人間の生命活動を、疎外することによって、それは人間から類を疎外する。すなわち、それは人間にとって類生活を、個人生活の手段とならせるのである。第一に疎外された労働は、類生活と個人生活とを疎外し、第二にそれは、抽象のなかにある個人生活を、同様に抽象化され疎外されたかたちでの類生活の目的とならせるのだ。<sup>6</sup>

類生活から個人的生活を分離することで、そして個々人の適切な相互関係を倒錯することで、

労働疎外は、人間性に特有な類的属性が発現されえない存在様式を人間性に押し付ける。人間の潜在能力は現実化されないままとなり、発展は妨げられ、人間的諸力は歪曲された、ないしは倒錯した仕方で行使される。

類的存在としての「人間」の性格は、現代社会において経験的に検知可能な顕在的な特徴ではない。それはむしろ、未達成の潜在力である。この潜在力の達成は人類史の事業である。だから、類的存在としての人間性というアイデアに暗に含まれているものは、歴史的存在としての人間性というアイデアである。そして、これによって意味されているのは、単にその活動と結合形態が時間の経過とともに変化する存在ではなく、顕在的な活動と結合形態のこれらの変化が累積的で方向性のある性格を持つような、われわれが連続する各段階ないしは時期を理解できるという点で1つの傾向を持つような存在である。こうした意味で人類が歴史的存在であると言うのは、この種属が全体として、歴史的過程の中で、胚から幼年期を経て生体期へと至る変化過程において個々の人間存在および他の動物によって経験される発生・発達に類似した何事かを経験するということである。成人においてのみ幼児の潜在力は完全に現実化する。個人の成長は自己実現の過程である。だから人類の場合、共産主義社会は、より初期の歴史段階では単に潜在的であったものが現実的なものとなるころの形態である。歴史的過程は人類の「発達」過程であって、それを通じてその類的諸力が完全に発達し、特有の類的性格が実現するのである。

労働疎外の分析は、種属の「発達」過程と個人の発達過程との間に必然的あるいは普遍的な関係が存在しないことを示している。労働が疎外されているところでは、種属の「発達」は個人の発達を犠牲にして生じる。

たしかに、労働は富者のためには驚異的な作品を生産する。だが労働は労働者には赤貧をつくりだす。それは宮殿を造営する、しかし労働者には穴ぐらをつくりだす。それは美を生産する、しかし労働者には不具をつくりだす。……それは知能を生産するが、しかし労働者には低能を、クレチン病をつくりだす。<sup>7</sup>

他方、種属の歴史的「発達」は、諸個人に特有な人間的諸力の発達の前提条件となる。

人間的本質の対象的に展開された富を通じてはじめて、主体的な人間的感性の富が、音楽的な耳が、形態の美にたいする目が、要するに、人間的な享受をする能力のある諸感覚が、すなわち人間的な本質諸力として確証される諸感覚が、はじめて完成されたり、はじめて生みだされたりするのである。……五感の形成はいままでの全世界史の1つの労作である。<sup>8</sup>

人間は、個人のレベルでと同様に種属のレベルで「発達」を経験する（歴史的発達）という点において、他の動物と異なっている。人類において、種属の「発達」は諸個人の発達の妨害ない



し歪曲という犠牲を払って行われるが、長い目で見れば、個人の完全な発達はまだ、人間に最も特徴的な諸性格に関しては、種属の高水準の「発達」を土台としてのみ可能となる。この考察は他の動物には当てはまらない。マルクスにとって動物は、欲求、本能、対象変形力の間に1つの固定された種属特有の関係をもち、各々が「その属している種属の規準と欲求とにしたがって」<sup>9</sup>生産しているのである。

人間の場合において、この個人を超えた「発達」を可能にしているものは、「自由で意識的な活動」としての人間活動の特有の性格である。

しかし、生産的生活は類生活である。それは生活をつくりだす生活である。生命活動の様式のうちには一種属の全性格が、その類的性格が横たわっている。そして自由な意識的活動が、人間の類的性格である。<sup>10</sup>

自由かつ意識的に実践に従事できる存在は、その実践を批判的に検討することができ、それを現在の目的に合わせて、あるいは新しく設定された目的に合わせて変更することができる。自由で自己意識的な対象変形的実践は、その内に、(他の)動物の直接的で本能的な欲求充足活動が持たない変化と発達のための潜在力を持っている。そして、この「生産的生活」が類生活であるのだから、その「発達」——人間の生産力の発達——を性格付けることは、人間性それ自体の形成過程にとって本質的であるものを性格付けることである。

それゆえ人間は、まさに対象的世界の加工において、はじめて現実的に1つの類的存在として確認されることになる。この生産が人間の制作活動的な類生活なのである。この生産を通じて自然は、人間の制作物および人間の現実性として現われる。それゆえ労働の対象は、人間の類生活の対象化である。というのは、人間は、たんに意識のなかでのように知的に自分を二重化するばかりでなく、制作活動的、現実的にも自分を二重化するからであり、またしたがって人間は、彼によって創造された世界のなかで自己自身を直観するからである。<sup>11</sup>

また、

しかし社会主義的人間にとって、いわゆる世界史の全体は、人間的労働による人間の産出、人間のための自然の生成以外のなにもものでもないのであるから、したがって彼は、自己自身による自己の出生について、自己の発生過程について直観的な、反対できない証明をもっているのである。<sup>12</sup>

もちろん、労働を通じた、人間の対象変形力の増大を通じたこの自己創造は、単なる経済的な

いし産業的な活動を通じた自己創造——「経済主義的」歴史観——と混同されてはならない。確かにマルクスは産業上の生産の中に「人間的な本質諸力の公開的な露出」<sup>13</sup>を認めているが、しかし人間の完全な歴史的「発達」は、現在支配的な人間活動の断片化を止揚することを含んでいる。

だから私有財産の積極的止揚は、人間的な生活の獲得として、あらゆる疎外の積極的止揚であり、したがって人間が宗教、家族、国家等々からその人間的な、すなわち社会的な現存へと還帰することである。<sup>14</sup>

であるならば、歴史的「発達」過程は、自然と向き合う人間の対象変形力の多面的で前進的な増大として理解されることになる。このプロセスは、この力の担い手がこの力の行使の対象（自然）とともに変化するという点で人間の自己創造、または自己実現の1つとして理解されうる。特に、人間の認知力（「科学」）は生産力の発達の土台を成しており、それ自体、生産活動の結果を考察することを通じて発達する。人間の知覚力は同様に（115 ページの引用文参照）人間の知覚の対象の変化とともに発達する。美しい対象を創造する力と人間的な主観の美的感受性の成長は内的に関係し合っている。最後に、対象変形活動の目的は、人間がその歴史的自己発達の間に新しい欲求を獲得するとき、それ自体が歴史的に変化する。

われわれはすでに、社会主義を前提するならば人間的諸欲求のゆたかさが、したがってまた生産の新しい様式ならびに生産の新しい対象が、どのような意義をもつかをみてきた。すなわち人間的な本質力の新しい実証活動と人間的な本質の新しい充実とがそれである。<sup>15</sup>

この欲求の歴史的変化というマルクスの概念にとって中心となるものは、自己実現がそれ自体欲求の対象となるということである。

国民経済的な富と貧困とにかかわって、ゆたかな人間とゆたかな人間的欲求とが現われることをわれわれは見いだす。ゆたかな人間は、同時に人間的な生命発現の総体を必要としている人間である。すなわち、自分自身の実現ということが内的必然性として、必須のものとして彼のうちに存する人間である。<sup>16</sup>

人間性の歴史的自己創造は、そこにおいて人間の対象変形的、知覚的、審美的、認知的諸力と諸傾向性が人間的諸欲求それ自体の構造の変化とともに変化し増大するところの1つのプロセスである。しかしこのプロセスは、いわば真空内に生じるものではない。この諸力、諸傾向性および諸欲求について、その対象の概念なしに、すなわち「自然」（人間的な自然も含めて）なしに、

それを語ることは意味をなさないであろう。

## 歴史と「自然の人間化」

人間性が、それを通じて自己自身を創造するところの類全体の共同の事業は、マルクスによって「自然の人間化」と要約されている。外的、脅迫的、束縛的な威力としての自然は、集団的変化の延々と続く歴史過程の経過の中で克服されることになる。人間活動によって徹底的に変形される世界は、その上に人間のアイデンティティ自体が刻印される世界であるであろうし、それゆえもはや外的なあるいは疎外されたものとして経験される世界ではないであろう。

だからどこでも、一方では、社会のなかにある人間にとって、対象的な現実が人間的な本質諸力の現実として、人間的な現実として、またそれゆえに人間固有の本質諸力の現実として生成することによって、あらゆる対象が人間にとって人間自身の対象化として、人間の個性を確証し実現している諸対象として、人間の諸対象として生成する。<sup>17</sup>

このことは単に人間の実践的、対象変形的諸力に当てはまるだけではなく、人間の知覚および認知諸力の対象としての世界にも当てはまる。

どのようにして諸対象が人間にとって人間の諸対象として生成するかは、対象の性質とこの性質に対応している本質力の性質とに依存している。なぜなら、この関係の規定性こそまさに、肯定の特殊な現実的な仕方を形づくるからである。1つの対象が目にとっては耳にとつてとはちがったものとなり、また目の対象は耳の対象とはちがったものである。……だから人間は、たんに思惟のなかでばかりでなく、すべての感覚をもって、対象的世界において肯定されるのである。<sup>18</sup>

これらの引用文、また似たような他の文は、人間とその自然環境との関係の中で人類史によってもたらされた変化についての1つの定まった見方を示している。外的な、限定的な、条件付けられた両者の関係は、アイデンティティの融合へと至る内的な、非限定的な、無条件的な（すなわち「普遍的な」）関係にとって有利な仕方で変化する。人間と自然の「争い」は、自然を人間の領域の中に残らず組み入れるのに有利な仕方で克服される。全世界が認知的、審美的、実践的にわがものとされたときにはじめて、人間性それ自体が完全に実現される。

この共産主義は完成した自然主義として＝人間主義であり、完成した人間主義として＝自然主義である。それは人間と自然とのあいだの、また人間と人間とのあいだの抗争の真実の解決であり、現実的存在と本質との、対象化と自己確認との、自由と必然との、個と類とのあ



いだの争いの真の解決である。それは歴史の謎が解かれたものであり、自分をこの解決として自覚している。<sup>19</sup>

この歴史観は明らかに、同じテキストの他のところにある「人間の非有機的身体」としての自然のメタファーの内容と両立しないし、人間とその生存条件としての自然的環境との「物質代謝」の恒久的必要性という主張と両立しないし、人間がその中で自らの活動を形作り方向付ける条件と限界を永遠に設定するところの、人間活動から独立な、複雑な因果的秩序としての自然の現実性と両立しない。自然に対する人間性の関係についてのこれらの唯物論的な諸テーゼ——これらは他のところで、とりわけ後期の作品の中で、マルクスによって同様に承認されているのだが——は、この人間解放のユートピア的で観念論的な構想からは抜け落ちている。

この初期の歴史観の重要な価値内容は、その残留する観念論によっても危険にさらされている。マルクスは、人類とその自然環境との適切な関係は道具的、欲求充足的活動（もちろんこれも重要ではあるが）に還元できるものではないと主張している。正しく人間的な自然との関係は、そこにおいて審美的、認知的、実践的、自己形成的諸側面が共同に実現するところの多面的な関係である。この多面的な、正しく人間的な自然との関係は、単に欲求を満たすだけでなく、それ自体が最も重要な人間的欲求になるところのものである。

これらのアイディアはパワフルで説得力があり、現代の環境主義と非常にうまく調和している。しかし、これらの価値を実現したであろうところの自然への関係についてのマルクスの説明を見ると、その批判的潜在力の価値は低下する。もしわれわれが、われわれの意図に添う自然の徹底的な変形という基礎の上でのみ世界の中で寛ぐことができ、世界と適切に、人間的に結びつくことができるのであるなら、自然をその固有の属性によって評価することにどんな場所が残されているのであろうか。もしわれわれが、われわれが創造した世界の中でだけわれわれ自身を直観できるのなら、自然の一部としてのわれわれの地位に何が残されているのであろうか。自然は、その他者性を構成するすべてを剥ぎ取られる限りにおいてのみ、言い換えれば、それがそれ自体人間になる限りにおいてのみ、人間性にとって満足いくパートナーであるようだ。この自然への人間の適切な関係の見地は、18世紀の造園術の実践と類似点があるが、しかしこの見地は地球環境に拡張されている。これは、人間の物質的「進歩」のための潜在的な手段と資源の巨大な「倉庫」としての単なる功利主義的でエクスプロイタティブな自然観からは確かに大いに異なる構想である。自然へのわれわれの関係の審美的および精神的諸契機または諸側面が、肉体的欲求の充足のすぐ横に位置付けられているだけでなく、マルクスは人間のアイデンティティとわれわれの環境への関係との間のつながりをもっと深い仕方でも把握している。それにもかかわらず、マルクスの自然の「人間化」という構想は、より近代主義的な特徴を持つ自然支配についての功利主義的見地に劣らず人間中心主義的である。それは、まったくもって途方もない種属ナルシズムである。

## 人間と動物の対立

自然への完全に人間的な関係というマルクスの見解について、その価値内容の受け入れ可能な部分が、彼の存在論の批判的修正という土台の上で、どこまで支持されうるのかという問題を私は脇に置くことにする。その代わりに、人間／動物対比というどちらかといえばより狭い問題に戻ることにする。1844年の『草稿』のマルクスにとって（他の）動物はその生活様式の一定の固定性によって特徴付けられる、ということを見れば見た。動物が外的自然を変形するような活動を行うことができるとすれば、それは動物がその種属に特有な限定された規準に従ってそうできるのであり、動物の活動は個体的な（固定され、各種属に特有な）欲求およびその子の欲求の充足に方向付けられている。これと対照的に、人間は自由で、自己意識的で、社会的にコーディネートされた仕方での外的自然に働きかける。人間の生命活動のこの目立った特徴のゆえに、人間たちの結合形態と世界への実践的な関与の様式は、方向性を持った歴史的な変化を受けることになる。歴史的「発達」全体における特定段階の活動という位置付けを考慮するところの生活様式の説明だけが、何が完全な意味での「人間」であったのかを十分に特定できるのである。言い換えれば、人間を動物から区別するものは、人類史自体の経過の中でようやく明らかとなるところの何かである。われわれが見たように、人間に特有のこの歴史的発達過程は、自然の余すところなき「人間化」へと至る、自然に対するわれわれの変形力の増大の中に存するのであり、われわれ自身と自然の両方の（この2つのジレンマへと向かう）知識の連関した増大、「感覚の人間化」と等しいわれわれの知覚力の変化、そして欲求の構造の変化の中に存するのである。

であるなら、人間と動物との対比は、人間たちと他の動物たちとの対比であるだけでなく、完全に発達した人間性と未発達な人間性との対比でもある。「歴史そのものが自然史の、人間への自然の生成の、現実的な一部分である。」<sup>20</sup> 歴史的発達の過程は動物的な起源から完全な人間の実現への1つの運動であり、これはわれわれの力と傾向性に関してだけでなく、欲求に関しても言えることである。人間の対象変形力はよく発達しているがしかし労働疎外は克服されていないとき、真に人間的な欲求は発現されていない。労働者は欲求を経験するが、彼は真に人間的な潜在力を裏切る仕方で欲求を充足することを余儀なくされるのであり、それはむしろ動物的な欲求の経験と充足に類似しているのである。

マルクスの歴史的発達の概念と彼の疎外批判の両者を基礎付けているものは、彼が一方で「粗野な」「肉体的な」「動物的な」などと呼ぶ欲求と、他方で「人間的な」と呼ぶ欲求との対比である。

動物はたんに直接的な肉体的欲求に支配されて生産するだけであるが、他方、人間そのものは肉体的欲求から自由に生産し、しかも肉体的欲求からの自由のなかではじめて真に生産する。<sup>21</sup>

また、

粗野な实际的な欲求にとらわれている感覚は、また偏狭な感覚しかもっていない。餓死しかけている人間にとって、食物の人間の形態がではなく、ただその食物としての抽象的現存だけが実存する。すなわち、食物がどんなに粗末な形態をとっていても、まったくかまわないのであって、この栄養をとる活動が動物的な栄養をとる活動と、どの点で区別されるか、いうことができない。<sup>22</sup>

疎外された労働を論じる中で、マルクスは次のように述べている。「そのため労働は、ある欲求の満足ではなく、労働以外のところで諸欲求を満足させるための手段であるにすぎない。」<sup>23</sup> この意味での欲求は、労働生産物の労働者への分け前を決定する。「すなわち、ただ労働者が人間としてではなく、労働者として生存するに必要なだけ、また労働者が人類としてではなく、労働者という奴隷階級として繁殖するのに必要なだけ」。<sup>24</sup>

人間と動物との徹底した対立という観点から人間本性を説明するというこれらの行文でのマルクスの試みは、近代西洋哲学の本流と、また文化人類学や社会学のようなもっと最近の学問分野と非常にうまく調和している。自然と文化、動物と人間、身体と精神、という概念的対立は、これらの学問分野を支配する理論的伝統の中で基礎的、構成的役割を演じている。

これらの学問的諸母体の各々にとって、動物と人間との対立は、人間内部での動物（のような）存在と「真に」人間的な存在との対立をも含んでいる。例えばデカルトの二元論哲学のパラダイムにおいて、人間と動物との対比は人間の内部に空間的に広がる身体機構と自己意識的な「思考する」実体との対比を含んでいる。人間本性に特有で価値あるものが強調され、その汚点のない自律性が保持されるが、しかしそれは人間とその他の自然とのつながりを理解できないものにし、また人間の内部では、人間に特有のあの諸側面と人間に特有ではない諸側面とのつながりを理解できないものにするという犠牲を払ってのことである。

さて、人間性のそれ自身および自然との来るべき再統合というマルクスのユートピア的構想は、初見では、そうした二元論的思考法によって提出されるジレンマからの出口を約束しているように見える。しかしながら、初期の作品での人間／動物対比の系統的使用は、これと反対のことを語っている。この対比は歴史的に止揚されうるものとして陳述されてはいない。反対に、歴史的止揚のための人間の潜在力は、まさにわれわれを動物から区別するところのものである。自然へのわれわれの人間的關係にどんな変化が起ころうと、動物は単なる動物であり、動物のままであり続けるのである。

もちろん読者の多くはここで次のように言うであろう。「それはマルクスにとってはますます結構なことでしょう。」哲学的二元論への主な歴史的代替物——唯物論的および観念論的一元論——は繰り返し唱えられ、かつ見たところ決定的な反対論の対象である。観念論は、心から独

立した世界の現実性が現われるところのわれわれの経験の諸側面を、妥当な仕方、あるいは首尾一貫した仕方においてすら、説明することが極めて困難である。唯物論は対照的に、人間の意識および経験それ自体の存在と本性を首尾一貫した仕方、あるいは妥当な仕方、あるいは説明することが困難である。唯物論はたいいてい、推定上独特でかつ高く評価される人間の特徴または潜在力を説明するという目的とともに始まり、言い逃れをすることで終わる。われわれの時代では、人間本性の生物学的還元主義的説明が最もよく知られた被告である<sup>25</sup>。

もしこれらが本当に有効な唯一の選択肢であったのなら、二元論の擁護は比較的強力なものに見えたであろう。だが、これらは唯一の有効な選択肢ではない。マルクスの初期諸著作の二元論的側面の哲学および倫理的な困難性は、それ自体においてだけでなく、マルクスの知的および実践的事業全体の他の諸側面の点から見ても、途方もなく大きなものである。

### マルクスの人間／動物二元論に反対する

初めにまず、人間と動物との対立において自己をいわば「外的に」現わすようなマルクスの二元論（人間の内側で、肉体的または動物的なものと精神的または特殊人間的なものとの対立において、自己を「内的に」現わすような二元論とは異なる）を検討する。マルクスが動物と人間の本性を対比する仕方に対する私の批判は、20世紀後半によく一般に利用できるようになった人間以外の動物についての考え方に依っているが、しかし私の目的は単にマルクスが動物行動の科学によって取って代わられたということを示すことではない。むしろ私の見方は、人間本性の自然主義的説明がこれから『草稿』の中から「発掘」されなければならないというものであり、また、この自然主義的説明の哲学的核心は、その後のダーウィン進化論、生態学および動物行動学の発展の中に潜在的に含まれている人間／動物連続主義と非常に親和的であり、そして実際それを支持している、というものである。本書の残りの大部分を貫く基本的な哲学的筋道を成してもいるのは、人間本性のこの自然主義的説明である。しかしながら、『草稿』によって引き起こされている困難は、まさに、この新興の自然主義的立場が、最も影響力のあるマルクスの初期諸作品の読解において実際優勢であった二元論的および観念論的な哲学的思考パターンと絡まったままになっているということである。

したがって私の目的は、20世紀の動物行動学を初期マルクスに対抗して用いることではなく、むしろマルクスの思考のある諸側面を他の諸側面に対抗して用いることなのであって、マルクスのテキストが内的矛盾によって引き裂かれていることを知っているからこそそうするのである。私の現在の問題関心の中心からあまりにも離れてしまうことになるが、これら諸問題に関するマルクスの位置取りの歴史的变化を引き続き分析したい。エピクロス哲学についての1839年のノートで、マルクスは次のように述べている。「もし哲学者が人間を動物として考察することを最も恥ずべきことと考えないとしたら、彼にはもはやまったくなにもも把握することができなくなる。」<sup>26</sup> この極端で曖昧さのない人間／動物二元論は、事実上同時代に書かれた（そして同じ



ように出版されなかった) チャールズ・ダーウィンの「人間、精神および唯物論」に関するノートと際立った対照をなしている。このノートは1838年と1839年に書かれたもので、そこには人間以外の動物の知性、感情表現、社会性についての観察と思索が、また、これら諸点での人間と他の動物との顕著な類似性に関する所見がちりばめられている。例えば、

プラトンは『パイドン』の中で、われわれの「想像上のアイデア」は魂の先在から生じるのであって、経験から得られるものではないと言っている——先在を猿と読め。1、動物園の若いオランウータンは口をとがらせる。一つには不満から……。唇を一点へと突き出すとがり口のとき。人は、口をとがらせることはしないけれども、蔑んだり、嫌悪したり、反抗したりする際に唇を押し出す。<sup>27</sup>

1860年までに、マルクスの見解は1830年代後半の立場から大きく変化したので、彼は当時出版されたばかりのダーウィンの『種の起源』に「われわれの見解のための博物学的な基礎」<sup>28</sup>を認めることができた。20年の間に起こったマルクスの思考のこの根本的転回から考えて、1844年の『草稿』の中にあのような不安定で明らかに過渡的な論議を見出しても驚くべきことではない。

さて、『草稿』のテキストへと戻り、マルクスがそれによって人間と動物との対立を立証しているところの諸特徴をそれぞれ批判的に考察することにしよう。

1、動物はその種属の1つの実例であるが、人間は「全体に対する部分」としてもその種属に関係する。これは人間の無制約的な社会的協同能力についてマルクスが述べたことである。マルクスにとってこれは、いまだ現実的にはなっていないが潜在的に、共通の種属固有の事業において種属全体が協同することなのである。しかし、「自由な創造性」というマルクスの概念も認めるところのあの文化的多様性は、彼の見通しを受け入れ難いものとしている。地理的に分離し文化的に多様な発展経路および将来像が自然発生的に合流すると予期しうるどんな根拠があるのであろうか。必要な巨大規模での非強制的社会的協同を發展させる潜在力を人間が持っていると考えられるためのどんな理由があるのであろうか。(ここには第1章で論じたグローバル「コミュニティ」の考えとの明白な類似性がある。)

マルクスの人間／動物対比の動物側に関しては、その後の動物行動学的研究が、人間以外の種属の社会生活の豊かさと複雑さを明らかにしてきた。犬や猫のような動物、そして羊や牛のような群生動物においては、まさにその社会性が、人間による特定の用途のために必要とされる第一の資質である。一定程度の順応性、および社会性の形態の「開放性」についても同様のことがいえる。そこで、マルクスの人間／動物対比の単に思弁的なもの——いまだ未達成の歴史的見通し——を脇に置くならば、見えてくるものは、社会性の形態のための動物種属間で高度に差別化さ



れた種属固有のキャパシティの1つである。人間の社会性の度合いと形態は非常に際立っているが、しかし他の社会的種属もその種属に独特かつ特殊な仕方です社会的である。社会的協同活動それ自体のためのキャパシティとそれへの性向はわれわれの種属に独特の特徴ではない。

2, 人間は世界全体をその活動の対象として利用するが、動物は、種属の固定された規準に従って、世界を部分的にだけ利用する。ここでも、人間／動物対立の人間サイドが誤解を招きやすいものになっている。いつの日か地球表面全体が人間の意図的活動の痕跡をとどめるかもしれないということ、熱帯雨林と原生林の最後の部分が破壊または開墾され、北極と南極で植民と産業化が行われ、海洋が養殖場化したり有毒廃棄物の蓄積で不毛化したりするということ、こうしたことを人間活動の地理的拡大から推測することは確かに1つの妥当な推定である。しかし、生物圏における化学的および物理的エネルギー移転の大規模で途方もなく複雑な相互作用的循環について真実であると現在考えられていることは、そのような「ユートピア的」可能性が現実化するはるか以前に、われわれの種属がわれわれ自身の活動の意図せざる帰結によってわれわれ自身（および多くの他の種属）を破壊してしまうであろうということを示唆している。すべての対象変形的活動は、変化を被る諸対象の諸属性と、プロセス全体にわたって変化しない永続性を緊要とする活動、条件および手段の諸対象の諸属性との区別を前提としている。このために、想像可能なあらゆる方向への人間の技術力の無際限な増大を想定したとしても、世界の人間の諸目的への集中的ないし広範な余すところなき従属という考えは首尾一貫しない。

この対比の動物側では、動物行動学的諸研究が人間以外の動物の中での高度な多様性を、程度や性質や環境との相互作用の同一種内での可変性という点について明らかにしている。マルクスが目にしたように、鳥は使用材料、場所選択およびデザインの点でかなりの程度種属特有の巣を作る。それにもかかわらず、多くの種はあらゆる点でかなりの順応性を見せるのであって、特に標準外の環境条件に直面した時にそうである。道具の発明、制作、使用、および、道具使用の世代間伝授は、人間以外の霊長類、殊にチンパンジーの能力として現在よく認知されている。<sup>29</sup> これらの能力において人間と動物との間に深甚な相違があるということは明らかであるが、そのような深甚な相違は人間以外の動物種属を相互に引き離すものでもある、ということもまた真実である。マルクスは、理論的目的のために、他の動物の活動範囲の固定性と制限性、および、環境上の人間活動の範囲の適応性と普遍性を両方とも誇張している。同時に彼は人間以外の動物種属の中の多様性から注意をそらしており、包括的歴史的推定の方法で人間の生態学的多様性を見えにくくしている。これら「知的戦法」の各々は、種属特有的多様性の複雑なパターンの認識の代わりに、二元論的な絶対的対立の形成に寄与している。

3, 人間は歴史的潜在力を持っているが、動物は固定され規格化された活動様式を各世代で発現する。この対比は初めの2つを前提としているが、しかし重要な諸点でこれらを越えて行くもの

である。この対比がどのように作用するかを明確にするために、また、この対比をこの形態で維持するやり方の困難性を見るために、はじめにまず「歴史的潜在力」の概念と「歴史的発達」の概念——マルクスにおいて前者と後者は緊密に結びついている——を検討する必要がある。第一に、一方の力または能力と他方の潜在力とを区別することが重要である。ある力またはある能力を、例えば1つの器官に帰属させることは、それが何かをすることができるということを言うことである（たとえそれが実際にはそれをしていないかもしれないとしても——それがそれをまったくしなかったかもしれないとしても）。潜在力を帰属させることは、それが、現在は持っていない能力あるいは力を将来獲得することができるということを言うことである。われわれは異なった種類の潜在力を、それらが次第に獲得されるプロセスの性質に基づいて、あるいはそれらの獲得を可能にする外的条件の性質に基づいて、あるいは当該能力の保持者の性質に基づいて区別することができるであろう。

幼年期において人間または人間以外の動物は、その発達段階に特有の能力、または力を持っているといえる。1歳の子供は言うことはできるが立つことはできないかもしれないし、その少し後では立つことはできるが歩くことはできないかもしれない、というふうに。ほとんどの哺乳類の幼体は、生まれたときに人間の乳児ほど無力ではなく、成体が持つ種属特有の能力をより速やかに獲得する傾向があるが、しかし基本的には同一の考察が当てはまる。もしわれわれが、どのような能力がその種属の成体の特質なのかを知っているならば、われわれはその能力をまだ発達させていないがそのための潜在力を持っているところの正常な幼体について語るることができる。有機体の性質というのはこのようなものであるから、最低限の外的条件が満たされるならば、有機体はその種属の成体が持つ特有の能力を獲得することに帰結する発達を経験することになる。幼体のこのような潜在力を「発達潜在力」と呼ぶことができる。

その発達のどの段階でも、一個の有機体は、それが必要な器官組織を欠いているからではなく、成熟度が不十分だからでもなく、適切な学習体験を欠いているが故に、ある能力——「スキル」がここでのパラダイムである——を欠いていると言われることがある。そのような有機体のことをわれわれは次のように言うことができる。すなわち、それはある特定の能力（例えば、種属に応じて、獲物を捕るための、長い距離を飛ぶための、長い議論を理解するための、計算をするための）を欠いているが、しかしそれを獲得するための潜在力は持っている、と。そのような潜在力を「学習潜在力」と呼ぶことができるかもしれない。

発達潜在力も学習潜在力も個々の有機体の潜在力である。個体の全領域の潜在力の中にわれわれは、それを実現することが種属全体の特性を構成する潜在力と、有機体（の下位個体群）が独特の環境諸条件にさらされることによってのみ実現する潜在力とを区別することができるであろう。前者を私は「個体的種属潜在力」と呼び、後者を「個体的状況潜在力」と呼ぶ。人間の場合、言語習得のための（幼児の）潜在力は個体的種属潜在力であるが、フランス語を習得する潜在力は、フランス語圏の文化的環境の中で育てられた幼児にとって、個体的状況潜在力である。

ペットの犬は人間の命令に反応することを学習できる。人間に捕らわれているチンパンジーは手話を学ぶある程度の能力を身につけることができる。<sup>30</sup> 動物が適切な訓練でこうした能力を身につける場合、このための潜在力は、私の意味では個体的状況潜在力である。

しかし、マルクスの歴史的潜在力の概念は、少なくとも、個々の有機体が結合してできるグループによって保持されているような潜在力という考えを含んでいる。人間は特質上、例えば、程度の差はあれ多数の個々人の活動の多かれ少なかれ安定した結合パターンという形態を通じて生活手段を生産している。グループの生産力は、個々人が持つそれとは、確かに程度において異なっており、また本質においても異なっていると主張されるかもしれない。個人の能力とグループ能力のこの区別は、他の社会的動物種属に対しても維持される。社会的なミツバチやジガバチ、ビーバー、ライオンやハイエナ等の捕食動物はすべて、その下位個体群が多かれ少なかれ安定したグループを、そこから離れた個体によっては保持されない能力を持つグループを形成する種属である。

しかしわれわれは、単なるグループ能力とは別個のものとしてグループ潜在力のことを語りうるであろうか。時間を通じた累積的な諸力の獲得のために土台として役立つ個体レベルでの発達過程および学習過程と類似したものがグループにとって存在するのであるか。グループは、自分自身の活動を調整する力、あるいは自分の環境を変形する力を増大させるのであるか。グループがそうする範囲まで、われわれは「集団的潜在力」を語りうるであろう。事実、集団的潜在力は、幾つかの社会的哺乳動物にだけはかなりの程度で、人間の場合にだけは高い度合いで、十中八九、所有されている。

グループの獲得された能力（実現された潜在力）が、結合されたグループ——その成員のアイデンティティの維持に影響されない——の力の継続的増大を可能にするような仕方で世代から世代へと伝達されるところで、私は集団的な歴史的潜在力を語ることにする。例えば、書き言葉の習得は、文字使用以前の諸文明の集団的歴史的潜在力であったと遡及的に認識される。リテラシーは、ハンドルのように、各世代で再発明される必要はないが、しかし話し言葉とは違って、全文化の、あるいは全歴史時代の集団的所有物ではない。集団的歴史的潜在力の概念は、もしわれわれが適切に歴史過程を理解すべきであるなら、必要とされないと私は考えるが、しかし、私はこの概念を明晰に規定する方法に深刻な諸困難があることも認識している。それらのうち無視しえないのは、そうした潜在力の「担い手」または所有者が誰なのかを同定するという問題である。単純な集団的潜在力の場合、これは比較的むずかしいものではない——グループがまとまっており、交流が続いている限り、それは「同一の」グループとして同定および再同定される。歴史的時間という長く延びた広がりを通過する人間存在の「同一の」集団性を同定および再同定するということになる、それはまた別の問題である。

しかしながら、(初期)マルクスにとって、この問題は合成されている。というのは、彼は人類だけにさらに別のタイプの集団的潜在力を帰属させているからである。すなわち種属全体的協

同活動のための潜在力がそれである。潜在力は、ここでは、人間存在の経験的に境界設定可能な社会的に結合した個体群には帰属しえず、全体としての種属に帰属しうる。であるならば、マルクスにとっては、単純な集団的潜在力、および集団的歴史的潜在力に加えて、われわれが「種属歴史的潜在力」と呼ぶものも存在することになる。

最後に、これまでに区別された二種類（「集団的」または「種属」）の何れかの歴史的潜在力を持ちうるどんな種にとっても、区別されるべき更なる種類の個体的潜在力のための諸条件が存在する。集団的（あるいは種属）歴史的潜在力が実現されるなら、その範囲まで、個人がその個体的発達および／または学習潜在力を実現するところの環境状況が改変される。言い換えれば、集団的歴史的「発達」（諸世代にわたる集団的諸力の累積的獲得）が可能な種については、われわれは個体的状況潜在力というカテゴリーの内部に個体的歴史的潜在力の下位区分を設定することができる。個体的歴史的潜在力は、個々人が1つの集団——そこにおいて同性質の集団的歴史的潜在力が実現されてきた——の一員であることによって獲得することができる能力である。例えば、読み書きのための個体的潜在力は、この意味で1つの個体的歴史的潜在力である。それは、書き言葉の制度を持つ文化に所属している個々人だけによって実現されうる潜在力である。個人の発達と実現の可能性が、彼らがその中にある文化の歴史的達成にどの程度左右されるのかをわれわれが理解すべきならば、集団的歴史的潜在力のアイデアが必要である。

明らかに、これらの区別の定義については、より多くのことを述べる必要がある。しかし、マルクスが歴史的潜在力の概念を人間と動物との対立を支持することに使用していることに対して反論するという私の目的にとっては、少なくともこれを可能にするに十分なだけのことは述べられた。この対立の人間側については、種属歴史的潜在力の人間への帰属は、控えめに言っても高度に思弁的なものであるように思われる。これらがどの潜在力なのか（自然の人間化、等）を述べることに於いてマルクスに従おうとするなら、このことは確かである。さらに、マルクスにおいて潜在力の概念が一般に身に付けている規範的含意は、個体的であれ集団的であれ歴史的潜在力にはどう見ても当てはまらないように見える。ボタン一押による「大量死」の実行への個体的歴史的潜在力は、ハイテク兵器を作るための集団的歴史的潜在力の実現に依存する。しかしわれわれはこの歴史的達成をどのように評価するのであろうか。われわれはその中に、病気を治したり砂漠に花を咲かせたりする能力の拡大などと一緒に、人間的実現の大きさの歴史的開示、人間本性の歴史的開示の一側面を認識するのであろうか。もしわれわれがこの見解をとるならば、それは、人間はその本性の部分として破壊への、悪への潜在力を持っているという認識を伴うことを意味する。こうなると、人間の福祉、幸福の追求は、われわれにわれわれの潜在力の幾つかを抑圧し遮断する方法を見出すよう求めることになろう。福祉、「善き生」を、人間潜在力の実現と直線的に結びつけることはできない。

もう1つの選択肢は、実現するのが望ましくない、悪い、破壊的な、つまりは自己破壊的な歴



史的可能性を潜在力として認めることを拒否して、「潜在力」の価値含意を保持することであろう。この選択肢は、まったく弁護の余地のない形の「種差別的」な個別的訴答であるように思われる。「潜在力」の地位を拒否する個体的および集団的可能性の因果的重要性に対するユートピアの盲目への誘惑は、強力でもあり危険でもある。メアリー・ミッジリーが非常にうまく描いているように、われわれがわれわれ自身の中に観照することができなかった性向を動物に帰属させることで、人間／動物対立は、好都合な象徴的装置として役立ってきた。<sup>31</sup> これらの考察のポイントは次のことを示すことである。すなわち、人間だけが歴史的潜在力を持っていると推定することにおいてマルクスが正しかったとしても、ここから直ちに、倫理的地位に関して動物と人間との間に巨大な深淵があるという結論が得られるわけではない。

この点の重要性は、マルクスの人間／動物対比を、この分断の動物側から見てみると明らかとなる。すでに見たように、多くの動物種属はその行動において複雑性、多様性、適応性——動物行動を種属特有的生活様式の中の厳格に定型的なものを見なすマルクスの見解では否定されている——を示す。発達および学習潜在力、単純な集団力、そして、一定の限度内では集団的潜在力についてすら、人間以外の多くの動物種属のために弁護論的に語る事が可能である。霊長類の幾つかの種属では習得されたスキルの文化的伝達の証拠が実在するが（少なくとも今までのところ）集団的スキルの世代ごとに累積していく方向での伝達の証拠はない。<sup>32</sup> これは現在地球上に生息している他の動物種属と比較しての人間独特の特徴であるように見える。しかしながら、これが純粹に偶然的な問題であることに注意を払うことは意味のあることである。人間以外の種属がこの潜在力を未来においても進化させることはないと推定するためのアприオリな理由はないし、われわれの惑星がかつて歴史的潜在力を持つ人間以外のヒト科種属の住処になっていたと考えるための立派な経験的根拠がある。

さて、今や残されているのは、人間性の歴史的潜在力と、疎外された労働の支配下での人間性の疎外され、不具化され、矮化された、単なる動物的存在様式との間にマルクスが設けた倫理的対比である。第1に、人間の歴史的潜在力の実現を、人間が相互につながった形での、またその物質的環境とつながった形での人間の福祉、繁栄と同一視する必要がある。私は、この同一視が正当化されないことを今しがた示唆したところである。<sup>33</sup> 第2に、人間に、2つの対照的な状態の中で生存する能力を帰属させることが必要である。すなわち、単に生存しているだけの、あるいは生き残っているだけのものとして、「粗野な、身体的な」あるいは「単なる動物的な」欲求を満たすだけの存在として（労働能力とその能力を身体的に再生産する能力の単なる担い手として）、または、これと対照的に、繁栄しているものとして、満たされたものとして、完全に人間的なものとして。

しかし、「動物的欲求」への言及の場と人間疎外に対する倫理的批判を支えるための人間／動物対比の関連した使用は、動物の場合におけるこの能力の否定を必要とする。動物は単に生存しているだけである、とわれわれは想定しなければならない。動物として、彼らは単なる動物的欲



求だけを持っており、その欲求の充足が個体およびその種属の生活の維持と再生産のために必要かつ十分である。しかし、すでに見たように（何種類かの）動物も発達、学習、種属、状況、集団についての能力と潜在力を所持しているならば、これらの動物についても同様に、一方での単なる生存と、他方での繁栄、福祉、多様な潜在力の実現とを区別することが可能でなければならない。特殊人間的な歴史的潜在力という単なる事実、人間以外の動物にとっての繁栄と単なる生存との倫理的区別を消し去ることも、その存在論的前提を消し去ることもできない。

ここでのポイントは、マルクスが動物について単純に誤っていたということだけではない。それはむしろ、未来の共産主義社会における人間性と自然の関係変化の望ましさという彼自身の見解を蝕むような仕方、彼が誤っていたということである。また、これと結びついて彼は、自然の支配的（資本主義的）収奪様式に対する彼自身の倫理的批判の強力な拡張と深化から自分を切り離してしまうような仕方でも、動物について誤っていた。

「自然の人間化」の「薄い」解釈を採用し、それが動物の文字通りの「人間化」を含むのではなく、むしろ動物へのわれわれの関係の変化——恐らくこの関係をわれわれの「人間性」とよりよく調和するものに、より人道的な関係に変えること——を含むものでありたい。これは、マルクスの概念を彼が明言した自然主義と両立させるために必要な最低限の措置である。今や、「より人間的な関係」にどのような内容が与えられようと、それは、「粗野な、肉体的欲求」と動物の欲求とが同義ではない、ということを前提する。一方での、人間の福利を最低限満たす水準での動物の単なる生存と、他方での、繁栄、幸福、という区別、この区別が存在する場合に限り、その生活状態がわれわれの力の行使に依存するところの動物の取り扱い方法について「残酷な」取り扱いと「人道的な」取り扱いとを区別できる。

さらに、マルクスが「疎外」の概念で捕えようと企てた正しく人間的な生活様式からの病理学的な歪曲は、まさに同一の社会的活動の構造によって動物に押し付けられているあの生活様式と重要な点で平行である。外的目的のための単なる手段としての動物の取り扱い、動物の生命活動の強制的断片化、そして動物相互間の社会的結び付きの解体は、例えばマルクスの時代以来農業生産の技術的再編成とともに次第に激しさを増してきた商業的農業の特徴である。第5章で明らかにするつもりであるが、そのような行為に対する倫理的批判は労働統制の近代資本主義的形態に対するマルクスの批判に代わるものとして理解されるべきではなく、むしろその拡張・深化として理解されるべきである。しかし、マルクスの動物と人間の対比は、共通の因果的ネットワークの中に捕らわれている動物と人間の両者が共有する苦難の形態、これをそのように批判的に分析するための存在論的基礎を切り払ってしまうのである。

マルクスが、自然への関係において固定され規格化された活動様式を動物に帰属させたこと、そして彼が明らかに人間以外の動物の社会生活を意味のあるどんな仕方でも認識しえなかったこと、これらは両方とも、「肉体的欲求」と「動物的欲求」という語句をあたかも同一物であるかのように使用する彼の用語法に現われている。これは、他の動物の感情的、心理的、社会的生

の複雑性と多様性の否定を示唆している。そのような否定は「人間へと発達しつつある自然」というマルクスの歴史の性格付けを単なるレトリックにしまい、人間本性と歴史に対する洞察の2つの重要な源泉を切り離してしまう。第1の源泉——これは「人間へと発達しつつある自然」というアイディアに真剣な理論的内容を付与することを要請する——は、人類の先史的起源の探求、および他の霊長類系統からのわれわれの分化過程の探求である。

第2の源泉——これはその合理的正当化（すなわち人間と他の動物の親族関係の認識）を第1の源泉に頼っているが——は、比較心理学と動物行動学であり、ここにおいて人間に純粹に独自のものが人間と動物との間で共有されているものに照らして考察されるのである。これらの系列の探求が、ダーウィン以後、政治的に偏向し方法論的に疑わしい長い悪用<sup>34</sup>の歴史を持っているということは、この企てをまるごと放棄してしまう十分な理由にはならない。確かに現代進化論の内部には正当な論争の余地が大いにあるが、人間の祖先が霊長類の血統であることやわれわれが現代の霊長類と近縁であることに関して、進化論の見地からの主要な主張を否定することはもはや合理的ではない。社会科学者は、地球平面論者や異端審問官やバイブルベルトの特殊創造論者を支持したいと思うのでなければ、われわれの動物的起源および本性によって提出されている諸問題と取り組まなければならない。すでに見たように、マルクス、エンゲルス自身は1859年以後この見地の熱心な信奉者であった。<sup>35</sup>

### マルクスの二元論的人間本性論に反対する

しかしながら、おそらく、マルクスの初期の作品の二元論的側面に対する最も効果的な反論は、動物と人間という外的二元論から生じるところの人間本性内部の二元論に関するものである。われわれの本性についての徹底した観念論的見解の見通しに躊躇して、人間の内側に動物的な部分、層、あるいは側面を認識するのが二元論的アプローチの特徴である。人間は動物であるが、しかし霊魂、精神、意志、自己、理性、等々、大きな違いを生み出す追加の特別な「何か」を持った動物なのである。

すでに見たように、マルクスの初期の著作はまだこの伝統の範囲内に分類される。人間が自己の生存欲求を満たすためだけに働き、労働をそれ自体で1つの欲求として経験しないかぎり、その活動は単なる動物的活動にすぎない。人間の余暇活動、飲食、「装い」等が、より大きな種属的職業から分離されて、それ自体目的である限り、それらは単なる「動物的諸機能」にすぎない。餓死しかけている人間が栄養をとるとき、「この栄養をとる活動が動物的な栄養をとる活動と、どの点で区別されるか、いうことができない。」<sup>36</sup>人間の領域内でのこの動物／人間対立の再生産は、動物としての、あるいは動物のような、われわれの諸欲求、諸力、諸機能、および諸活動の中の幾つかを、「人間的」とされる（一般により高く評価されより基本的で存在論的な地位を割り当てられている）他のものから隔離することを伴うのである。

人間が何であるのかを理解するためのこの広い戦略に対する反論は、3つのグループに分けて

行うのが有効である。

1, 分割の人間側に来る諸力, 諸欲求, 諸活動, 諸機能 (等) は, 人間生活の残余 (動物的側面) との関連で理解することができなくなっている自足的で独立的で自律的な複合体として描かれる。しかし, 例えば人間の推論能力は身体的欲求や身体的活動の中で行使されるのであるが, こうした身体的なものから抽象された推論能力をどのように理解できるのだろうか。マルクス自身の場合, 人間性の倫理的理想は, 結束した共同体の事業の中で一人一人の多様な活動を統合する1つの存在様式である。統合された自己実現というこの概念は, 『草稿』に残留している二元論と矛盾したままとなっている。

2, 分割の「動物」側に来る諸力, 諸欲求, 諸活動, 諸機能 (等) は, それに対応して, おそらく幾分恥ずべき残余の諸特徴として冒瀆されている。継続的で不快なまでにしつこいこれらの現前, 噴出, 妨害は, 屈辱的であり, われわれが権利と感じている完全な意味での自尊心をわれわれから奪う。肉体的な生存と機能への恐れと軽蔑は, もっと哲学的な二元論ではかろうじて隠されている。それは, 肉体労働よりも精神労働を, 女性性 (「自然的」) よりも男性性 (「文化的」) を, 感情よりも理性を, 物質よりも精神を, そして「未開」よりも「文明」を評価するための根底と栄養分を供給する。それは, セクシュアリティと死のような人間と動物が共有する条件の根本的特徴をめぐって混乱し, 恐れ, 罪の意識に苦しむ文化を生み出している。

3, 二元論哲学の遺産は, 最も問題の多い現代の制度諸形態や諸慣行の多くに受け継がれている。組織化されたハイテク「ボディ・マシーン」の一形態としての現代的「医療」——身体という機械の中に欠陥を検知し, 診断し, 治療する——は間違いなくデカルト主義の遺産である。人間の心理的, 感情的, 文化的, 社会経済的な諸側面や諸情況が病気の原因と快復に関係していることは, 近年ようやく広く理解されるようになったばかりである。<sup>37</sup> このことは, 政策論議や医療改革の中で本来有すべき中心的位置をいまだ得ていない。公共政策の他の領域でも, 「基本的」(肉体的) 欲求を「高度な」(感情的, 文化的, 自己実現的) 欲求から分離することが, 住宅や栄養基準設定, そして教育のような領域においてすら, 福祉国家的施設の優先事項の根底にある。<sup>38</sup> 多くの海外援助政策も, 文化的, 社会経済的, 環境的情況——その中で食料や住居のような「基本的」欲求が満たされる——を軽視している。種々の欲求を相互から分離することは, 多くの場合善意によるものであるが, 同様に多くの場合破滅的な結果をもたらす。諸欲求は不可分に接続し合っており, それは欲求が経験される仕方においても, 欲求充足の因果的な諸条件の混交においてもそうなのであるが, この諸欲求はすべて, あまりにもしばしば抽象的に単一優先的介入の「攻撃目標にされ」, そしてそれが, 意図せざる帰結の拡大された連鎖を結果としてもたらしてしまうのである。アジアと南アメリカの大部分へ, いわゆる「緑の革命」の技術が輸出されたが,

その環境的費用と社会的費用が良い例である。<sup>39</sup>

私は、初期の『草稿』におけるマルクスの思惟が2つの密接に関係する二元論的対立、すなわち、人間と動物との対立、および人間内部での人間的なものと動物的なものとの対立、これによって支配されているということを示そうとしてきた。私は、マルクスの中に現われているような二元論、および西洋文化の構成的特質としてより広く現前しているような二元論の両者に反対すると信じているところの考察を進めてきた。また私は、人間／動物二元論がマルクス自身の理論的・実践的企図の主要点と両立しないことも示唆した。しかし、もしそうであるなら、これまで私流の読解が基づいてきた二元論を取り除いてくれる他の要素あるいは側面が、ダーウィン以前の時代においても、マルクスの思惟の中に存在するということになる。

### 還元主義または種差別なき自然主義？

本章の残りの部分で私は、マルクスの初期『草稿』のもう1つの読解と再構築の概略を、哲学的二元論と観念論の両者に反対し、自然主義に賛成するが、なお還元主義的人間本性論ではない諸要素に集中することで、提示したいと思う。それは、人類の特異性と特殊性にしかるべき場所を与える見解であるが、それは「人間は自然の一部である」というマルクスの主張の中の依然として正当と認められるものを損なうことなくそうするのである。

驚くべきことではないが、このもう1つのアプローチにとって見込みのあるテキスト上の素材の幾つかは、おそらく「ヘーゲル弁証法と哲学一般との批判」と題された草稿の中に見出されるはずである。

人間は直接的には自然存在である。自然存在として、しかも生きている自然存在として、人間は一方では自然的な諸力を、生命諸力をそなえており、1つの活動的な自然存在である。これらの力は、人間のなかに諸々の素質、能力として、衝動として実存している。他方では、人間は自然的な肉体的な感性的な対象的な本質として、動物や植物がそうであるように、1つの受苦している、制約をうけ制限されている本質である。すなわち、人間の衝動の諸対象は、彼の外部に、彼から独立している諸対象として実存している。にもかかわらず、これらの対象は、人間の欲求の対象であって、彼の本質諸力が活動し自己を確証するためには欠くことのできない本質的な諸対象である。……飢えは自然的な欲求である。したがって、それを満足させ鎮めるためには、自分の外部にある自然、自分の外部にある対象を必要とする。<sup>40</sup>

この一節の中でマルクスは、「自然存在」としての人間の地位、人間が(他の)動物および植物と分かち合う地位を主張している。自然存在として、人間が他の生物と共有する3つの関連し



合う特徴がある。第1に、彼らは自分の外側に独立して存在する対象への自然な欲求を持っている。例えばすべての生物は栄養摂取の欲求を持っている。この欲求の対象——食料——は彼らから独立に存在している。第2に、すべての生物は、この欲求を満たすのに必要な自然な力を持っており、またそれを行使する自然な性向（「本能」）を持っている。第3に、外的対象に関わるこの欲求充足活動は種の本質的諸力の「確証」あるいは「発現」として本質的である。

言い換えれば、外的自然との相互作用は、すべての自然存在の生き残りのために必要である。自然存在の各種属は、自然との相互作用においてその種属独自の様式またはパターン——それ自身の「類生活」——を持っている。そして最後に、(多くの)各種属は、この独自の類生活にあずかることによって、はじめてその本質的本性を完全に発現する——各種属がそれになるためにその潜在力を持っていたところのそれにははじめてなる。

「しかし」と、マルクスの論述は次のように続く。「人間は、ただ自然存在であるばかりではなく、人間的な自然存在でもある。すなわち、人間は自己自身にたいしてあるところの存在である。」<sup>41</sup> 徹底的に自然主義的な仕方でも人間本性を語り始めたものの、マルクスはここで再び後退し、二元論的対立、今回は「人間的なもの」と「自然的なもの」との対立を再設定しているように見える。しかしながら、そのように読解する必要はない。ここでの「人間的なもの」は、自然的なものとの対立者というよりはむしろ、その内部での1つの制限、内訳あるいは下位区分として理解されるものである。これはなお自然主義の一形態であるのであって、それというのは、人間が他の「自然存在」と共有するものが存在論的に根本的なものと見なされているからであり、これに対応して、人間が何でありそれがどのように振る舞うのかを理解し説明するという目的が優先されているからである。しかしこれは、自然の秩序の内部で、人間の特異性と特殊性、人間の社交性の形態とその潜在力の完全な認識を見込むという意味での還元主義的自然主義ではない。人間本性の二元論的および観念論的説明は、(他の)動物からわれわれを区別すると思われる諸特徴を決定し、この基礎上で人間本性論を詳しく論じていくのであるが、これに対し自然主義的アプローチは自然存在に共通する範疇から始め、その土台から、性質、形態、生活様式における明確な相違を明らかにしていくのである。

マルクスの論述では、すべての生物は欲求を持っており、その欲求の対象は外的で独立している。それゆえ、欲求の充足は、その有機体の環境と相互作用し環境をわがものとするを必要とする。欲求の特定の内容、欲求と活動形態とを媒介する機構、そして欲求充足活動それ自体の性質は、光合成の作用から虎の狩りをへて蚊の「一刺し」まで、もちろんほとんど想像もできないくらい多様である。しかしながらポイントは、共通の分析枠組みのおかげで、われわれは当該種属の生活様式全体の中に、生物化学的、神経生理学的、解剖学的、動物行動学的、生態学的な諸事実と諸過程の細目にわたる全特性の意義を認識することができるということである。

各種属はそれ自身の特有な類生活を有している。有機体は類生活の文脈の中でのみ本質的な諸力を「確証」または「発現」できるのであり、それゆえ有機体は種属特有の生活様式を送るため



の条件が満たされるときにのみ繁栄するということができる。各種属についてわれわれは、単なる有機体としての生き残りのための条件——最低限の栄養的必要の充足、捕食動物からの保護、等——と、繁栄のための、類生活を送るための条件とを区別することができる。しかし、どのようにこの区別を行うのか。種属の生き残り条件と繁栄条件の割り出しは、種属ごとに異なるであろう。そのような条件の経験的決定は、少なくとも動物行動学と生態学の内容の一部である。

であるならば、マルクスの初期『草稿』の非二元論的なもう1つの読解は、これまでのところで、このテキストにおけるマルクスの中心的テーマを取り扱うための概念的 방법에重要な変更をもたらしたのである。すなわち、労働疎外がそれである。私有財産制の下で、労働者の生存を可能にするための条件は与えられているが、労働者が自分たちに特有の「類生活」を送りつつ自分たちの力と潜在力を確証するための条件は拒絶されている。歪曲された病理学的生活様式がその帰結である。このテーマはマルクスの批判の倫理的力をほとんど失うことなくさらに明細かつ入念に仕上げることでできるものであり、しかもそれは二重の利益、すなわち、まったく同じ分析枠組みを、この歪曲された人間の生活様式に捕らわれた多くの他の生物が押し付けられているところの生活様式に対する批判に適用できるという利益、そしてマルクスの高度に思弁的な概念である際立って人間的な「種属歴史的」潜在力が不要になるという利益を伴うものである。

本章を閉じるにあたって私は、自分が擁護する形の自然主義がどのようにして人間内部の「人間的なもの」と「動物的なもの」との関係を理解する望ましい方法を提供することになるのか、言い換えれば、どのようにして還元主義に陥ることなしに二元論を放逐するのか、このことについて予備的な短い指摘をしておきたい。「人間本性」の自然主義的特定は、われわれが他の生物と共有する「自然存在」の共通の核心についての最初の認識からわれわれに固有の特徴を区別し、そして彫琢するという問題であることを示唆した。しかし、この差別化のプロセス、何が際立って人間的なものなのかを論じるプロセスはすべて、あまりに容易に二元論者の流儀に陥ってしまう。もしもそれが、人間が動物と共有する諸力、潜在諸力、諸要求「に加えて」人間が有する諸力、潜在諸力、諸要求の特定に集中するようになれば、それは自然主義に達してはいない。これは、人間だけができること（読むこと、書くこと、話すこと、<sup>42</sup>交響曲を作曲すること、大量破壊兵器を発明すること、等々）があることを否定することではない。これはむしろ、人間だけができることは一般的に、他の動物もできることの特異な人間的な仕方に根差していると理解されるべきだと言うことなのである。自然主義的アプローチの純度証明として私が強調したいのはこの特徴である。

このアプローチが實際上意味していることは、おそらく『草稿』におけるマルクスの「欲求」概念の取り扱いを研究する仕方によって説明することができる。すでに見たようにマルクスは、「粗野な」「肉体的」「動物的」欲求のことを「人間的欲求」と対比しつつ様々に語っている。幾つかの節で人間的欲求は、別個の、特異な部類の欲求で、「動物的」生存的欲求に加えて設定されたもの、人間としてのわれわれに特有なものに見なされているように見える。われわれは、こ

の意味での人間的欲求を2つの型に大別することができるであろう。第1に、「自己実現」欲求と呼ぶことができるもの。

ゆたかな人間は、同時に人間的な生命発現の総体を必要としている人間である。すなわち、自分自身の実現ということが内的必然性として、必須のものとして彼のうちに存する人間である。<sup>43</sup>

マルクスは、このような自己実現への欲求、潜在力の現実化への内的欲求は、自己意識的存在にとってだけ可能であり、しかも長期の歴史的「発達」過程の基礎上でのみ十分に獲得される、と示唆しているように見える。

際立って人間的な欲求の第2の部類は、同じように、自己意識的存在としてのわれわれの地位とつながっているが、必ずしもわれわれの歴史性とつながっているわけではない。マルクスは、われわれの外的環境（「植物、動物、岩石、空気、光など」<sup>44</sup>）のことを、それが人間の科学と芸術の対象であるかぎりにおいて「精神的滋養物」を構成するものとして語っている。自然を肉体的にわがものとする（他の動物と共有する）欲求に加えて、人間は自然を審美的および認知的にわがものとする精神的欲求を有する。この解釈は、次のような一節によって強く示唆されている。

動物はたんに直接的な肉体的欲求に支配されて生産するだけであるが、他方、人間そのものは肉体的欲求から自由に生産し、しかも肉体的欲求からの自由のなかではじめて真に生産する。<sup>45</sup>

自然との関係において人間の実践には2つの種類がありうるように見える。1つは肉体的欲求の充足で、われわれが他の動物と共有するもの、もう1つは精神的（審美的、認知的）欲求充足で、われわれが特別に有し、「真」の意味での生産を構成するもの。この区別は、「必要」の領域と「自由」の領域の区別として後期の作品に再現する。

しかしながら、この一節については、自然主義的なもう1つの読解も可能である。正しく人間的なものと認めるためには、生産が肉体的欲求の充足と関係しないということが必要なのではなく、むしろ生産は直接的な肉体的欲求の支配下では行われるべきではないということが必要なのである。マルクスが動物と「まったく人間的ではないもの」とを明らかに等置していたことを脇に置かならば、区別についてマルクスがしていたのは、共通の欲求の充足様式間の区別というよりはむしろ、異なった欲求を満足させるやり方の間の区別である、と読むことは可能であるといえる。審美的および認知的欲求の充足は、肉体的欲求を満たす行為に加えて、さらなる行為を行うことを必要としない。完全に人間的な生産活動において、あるいは「真」の生産活動におい

て、肉体的欲求は審美的にも認知的にも満足できる仕方で満たされるであろう。であるならば、少なくとも「人間的」欲求のこの下位分類について、われわれは次のように言うことができる。すなわち、それらは肉体的欲求に加えてその上にある特異な要求の複合体ではなく、むしろ肉体的欲求を経験し、同定し、充足する仕方に関係する要求である、と。

例として、栄養に対する肉体的欲求を取り上げてみよう。この欲求は、人間と動物の両者に共通である。すべてではないにしても人間以外のかんりの動物は、心理学的、行動科学的にわれわれ自身に十分似ているので、われわれは比喩を用いることなく明白に、彼らが空腹を感じ、食料を探し、それを消費していると語ることができる。すべてのそのような動物にとって、「食料」と見なされる対象と物質は、彼らの栄養上の必要を満たす全範囲の対象と物質の部分集合である。さらに、これらの対象と物質を獲得し消費する様式だけが、当該種属の「生活様式」の特徴であり、あるいはその固有の力と潜在力が行使され現実化するところの活動である。そのような動物が実際に行う摂食活動は、遺伝的に受け継いだ素地、学習、環境的機会構造の重層的に規定された帰結である。

これはすべて、人間にとって真実であり、他の動物種属、特に哺乳類と鳥類にとって真実である。よって、先の引用文(121ページ)でマルクスが明示した「餓死しかけている人間」の摂食活動と動物の摂食活動との対応関係は、その土台が崩されているのである。栄養的必要の単なる充足を種属特有の摂食活動と同一視することは、人間に対してでもできないし他の種属に対してでもできない。人間の飢餓状態が引き起こす食物への病理的または歪んだ関係は、食物への動物的關係、または動物のような関係ではなく、人間の摂食活動の特殊な病理または歪曲なのである。しかし、動物と病的人間とのこの誤った同一視にもかかわらず、マルクスのコメントを啓発的かつ自然主義的に解釈することは可能である。飢えた人間の食物への関係を病理的なものにするのは、空腹の対象が単に食物としてのみ存在し、その唯一の意義が、それを消費することで空腹が満たされることにある、ということである。マルクスが他のところで言っていることを引くならば、そのような摂食活動は「直接的」欲求の「支配」の下で行われている。この摂食活動は手段／目的活動であり、それ自体の内在的な満足を伴う活動ではない。それは、人間活動の審美的、認知的、精神的次元を欠いた活動でもある。

この自然主義的読解では、空腹を満たす「十分な」または「適切な」人間的な仕方と、同じ欲求を満たす人間以下の仕方または病理的な仕方との間の相違を作り出すものは、欲求を満たす活動の中に内的な知的小および審美的満足が存在するか、あるいは欠落しているかである。われわれは今や、正しく人間的な形態をとる空腹充足のための授権的諸条件とは何か、という問いに対して答えを与えることができるところまできている。環境の中にある栄養物の利用可能性と、それをわがものとするための個々人の側での技術力に加えて、この授権的諸条件は適切な審美的・認知的な規則と源泉をも含んでいるのでなければならない。

しかしわれわれはさらに、この審美的・認知的な規則と源泉が存在するのはどのような条件の

下でなのか、と問うことができる。短い答えは、人間の文化の文脈内、というものである。この読解がマルクスの思考に従うものであることは、肉体的欲求充足への非人間的関係を規定する「直接的」というマルクスの用語法が示している。適切な人間的摂食活動は象徴的、文化的に媒介された欲求充足である。あらゆる文化は、何が食物で何が食物でないかを（栄養上の要件を満たすあらゆる可能な諸手段の範囲内で）定める分類法——しばしば一定の品目の消費に対する厳しい制裁禁制を伴う——を持っている。同様に、規範的規制が、文化的に認知された食料品の占有様式、食料品の調理、共同体内での食料品の分配、食料品消費の作法、等々を律している。<sup>46</sup>

さて、この時点で提起されることになるであろうと思われる2つの問題がある。第1に、私が擁護しているような自然主義的アプローチが、なお人間の特殊性を認める際の仕方を例示するために、私は1つの肉体的または有機体的欲求、すなわち食料への欲求に焦点を合わせてきた。他の部類の欲求を論じようと試みる際に、人間以外の比較物が欠けていることで、私のアプローチが二元論に戻ってしまうということがあるかもしれない。よって、このアプローチが他の部類の欲求に対して、あるいは人間本性の（少なくとも何種類かの）他の動物と共通する他の諸側面に対して有効であるかどうかを研究することは極めて重要である。私が提案するアプローチについての第2の問題はどちらかといえば反対の方向へ向かうものである。すべての「人間的な」諸欲求が、他の種属と共有されている一般的諸欲求の特殊な充足様式として分析されうることを示唆することで、結局、私の構想は還元主義の一形態に戻っているのではないだろうか。私は、純粋にわれわれの種属に独自の部類の諸欲求、諸力、諸活動を一貫して認知することができるであろうか。<sup>47</sup>

最初の問題に対する私の返答は、マルクスが動物を、食料、住処、生殖のような有機体的欲求の主体として、また、これらの欲求を不変で無反省的で紋切り型の個体行動のパターンによって満たそうとする「活動的」存在として描写したことへの先の批判を思い出すことである。現代の動物行動学や動物生態学の成果に依るならば、われわれは今や欲求の多様性と複雑性を動物諸種属の中に認めないわけにはいかない。各種属はそれ自身に固有の欲求パターンを持っており、また、その欲求パターンを満たすための適切な生活様式を持っている。さらに、少なくとも幾つかの種属では、この固有の欲求パターンは、心理的、社会的、有機体的欲求の複雑な分節構造および複数次元の欲求を含んでいる。「動物的欲求」は、「有機体的」欲求に還元されえない。よって、自然主義的な動物／人間連続アプローチが、（栄養摂取のような）「有機体的」または「肉体的」欲求だけの分析に限定されることは決してない。

しかしながら、このことを明言するだけでは明らかに不十分である。このような要綱的主張の妥当性を示す最低限の必要条件を満たすためには、私は、文化的境界も種属的境界も越えて適用可能な欲求同定分類のための枠組みを提示できなければならないし、他方では同時に、種属と特定の文化の間でなされる説明的差別化を可能とする枠組みを提示できなければならない。もちろんこれは、まったくもって無理な注文である。本書の残りの部分の大半は、これを実行するため



の様々な方法の含意の長い探究に当てられる。この段階で私が提供できることは、第1に、そのような枠組みに賛成または反対する証拠または合理的根拠の出所を予備的な仕方では指摘することである。第2に、素描的、暫定的な形態においてはであるが、私はそのような枠組みがどのようなものであるかということについての一般的な概要を与えることができる。私は再度、これが本書およびこれに続く研究のための暫定的な方向付けとして意図されているということを強調しておきたい。これはいかなる意味においても、人間本性あるいは人間的欲求の最終的な説明として提出されてはいない。

第1に、証拠と論争の出所の問題。幾つかの関係し合う諸学——動物生態学と動物行動学、古人類学、進化論それ自体、等々——は実在的証拠と論争テーマの出所として明白かつ直接的な適合性を有する。もちろん、ここで行われる推論はすべて議論の対象となるものである。これらの諸学はそれ自体、思想諸学派の対立によって特徴付けられており、人間本性と人間的欲求についてのわれわれの理解に対するそれら諸学の関連性を解釈することは、「所与の」諸原理を適用するという問題ではなく、1つの創造的な知的課題なのである。

われわれが提案する人間本性および人間的欲求の自然主義的見地には、その根拠の出所がさらに2つあるが、それらは慣例的に人文社会科学に分類されている。これらは私が擁護している種類の自然主義的プロジェクトに対して最も強力な反論を提出していると受け取られていることから、私はこの2つに注目したい。第1の出所は文化人類学である。これは、人間本性の普遍的特性という考え（種属の分断自体を横断する普遍的特性という考えはいうまでもなく）に対する最も強固な幾つかの反論の学問的な基礎となっている。文化人類学者にとって、人間的活動の性質と意味は、活動の「ローカルな」文化的文脈が規定するところの象徴的および規範的秩序の中のその場所によって与えられる。社会学者が一般化のプロジェクトにおいて課する考案された分類図式は必ず、多様な文化の自己理解に対する暴力であらざるをえず、したがって研究対象となっている諸活動の誤った説明であらざるをえない。このような議論はある種の認知的文化相対主義の方向を指し示しているが、しかし、これらの結論を論証しようと努める際、文化相対主義者はパラドックスに直面する。彼らは「疎遠な」信仰や習俗について説得力のある説明を提供しなければならず、また同時にこれらの信仰や習俗が「われわれの」文化の観点からは理解できないことを示さなければならない。文化人類学者が「疎遠な」習俗をわれわれに理解させることに成功する限り、彼女はそれが「われわれに」とって理解できないものであることを示すことに失敗する。おそらく、文化人類学はそれ自体まったく無価値で一貫性のない企てであるのか、あるいは、結局のところ文化横断的な理解が可能（多くの場合、困難であるとはいえ）であるのか、どちらかである。このことは、文化人類学を人間の普遍的特性の研究というわれわれの仕事へと関連付ける1つの道を示している。すなわち、もしも文化的理解が可能であるのなら、それは何によって可能なのか。まったく異なった人間の諸文化が相互コミュニケーションと相互理解を達成するために必要な文化横断的橋頭堡とは何なのか。<sup>48</sup>



人間の普遍的特性という考えに反対してしばしば採用される第2の系列の議論は、様々な学問的源泉——歴史学的、人類学的、社会学的、心理学的——を持っている。この系列の議論で強調されるのは、人間の適応性と可鍛性、すなわち社会的に「構築」あるいは「形成」されるわれわれの能力（および欲求）、に関するものである。個人の「アイデンティティ」「主観性」（「主観」それ自体すら）は、人間個々人が社会的存在になるときに、地域的に変化する諸関係や諸慣行によって構成され改変されると考えられている。<sup>49</sup> しかしながら、これに対比されるのは、社会学的、歴史学的、心理学的記録のいうまでもなく明白な一特徴として、個々人と特定地域の文化的文脈との関係の中に抵抗、疎外、不満が広く行き渡っていることである。意味深いことに、これらの特徴は、心理的衰弱、身体的病氣、そして自殺にまで現われているものである。これらは人間の適応性と可鍛性の限界に関する証拠の一源泉である。社会文化的生活条件が個人に押し付けるある種の要求の病理的帰結を分析することは、殊にそれが文化横断的なパターンを目当てに遂行されるならば、人間の普遍的特性の探求に重要な洞察をもたらすことができる。さらに、人間の適応性と可鍛性を基準にして、次のように問うことは理解の助けになる。人間がこれらの能力を持っていることの人間にとっての真実とは何なのか。これらの能力は特殊人間的な「生活様式」においてどのような役割を演じているのか。<sup>50</sup>

もちろん、これらの目立った洞察の源泉がすべて、人間本性の一般理論において、互いにとって快適な答えを生み出すであろうという事前の保証はない。ここでの私の立場にとってはより深刻なことだが、そのような一般理論が、これらの異なる系列の探求によって支持されたとしても、それが自然主義と人間／動物連続主義への私の関与の正当性を確証する保証もない。この探究が、人間／動物二元論を確証して反自然主義的見解に帰着してしまうことはない、と想定するアプリアリな理由はない。しかしながら、これらの線に沿った探求が、特殊人間的な生活様式を共に構成する——が、にもかかわらず啓発的比較を基礎付けるため、人間以外の動物種属に適した生活様式との十分な接点を提供する——相互関係的諸特徴の一定のパターンに収束する、ということの徴候がある。要約すると、これらの相互関係的諸特徴とは次のようなものである。

1, 有機体として限られている生存期間。誕生と死。これは人間的条件と動物的条件に共通する特徴であるが、しかし人間の場合、これは特別に問題となるものであって、それは世代を越える社会文化的連続性への要求のせいであり、その結果として人間文化の有機的過程に割り当てられた形而上学的・倫理的意義のせいであり、そして、規範的に規制された生殖活動と死別の感情的次元に対する要求のせいである。

2, 個体の生存期間における成長、発達、衰弱の時間的段階区分。これもまた人間と他の動物の生に共通する特徴である。人間以外の多くの社会的種属も社会生活のパターンを人間と共有しており、そこでは社会的な地位、関係、および活動パターンが有機体としての推移と関係してい

る。しかしながら人間は、全生存期間の中の小児依存期間の長さにおいて際立っている。これは複雑で洗練された社会文化的スキルや能力を獲得する必要と関係しており、また、社会化と育児を維持するための長い対人関係を前提としている。

3, セクシュアリティ。生殖と性的活動の社会的規制は人間と人間以外の多くの動物に共通している。ただし人間は生理学的に独特であり、特に月経周期中の外的発情サインが欠如していることにおいて際立っている。<sup>51</sup> これは、とぎれない性的受容性と結びついており、直接的な生殖の必要性からある程度分離された人間の社会生活における性的活動に、進化論的に重要な役割があることを示唆している。人間は、性的差異を組織化する社会文化的および心理学的側面の複雑性において、また、二者間の長期にわたる感情的絆を強化するために性的活動を利用することにおいて、独特である。これらの相違は人間の心理学的独自性とも、上記の特徴の1と2ともつながっている。

4, 有機的欲求の充足における社会的協同。「活動的自然存在」としてのすべての動物は、生命を維持するために、自分たちの環境上で何らかの活動を行わなければならない。社会的動物は、獲物を追うときや縄張りを防御するときなどに、程度の差はあれ多くの個体の活動を調和させ、おそらくはそうした活動が成功する可能性を高めているが、しかし同時に社会的調和——協同集団の個々のメンバーに獲物を分配する際の調整の仕方、調和を円滑に進めるための洗練されたコミュニケーション手段の発達、等々——のさらなる必要性を課しているともいえる。社会的相互作用と協同の慣例的に確立された象徴的規制様式は、他の種属にも現われているとはいえ、人間において無比の度合いにまで発達している。すべての人間は自分たちの欲求を満たすために物質的環境上で社会的に活動しなければならないが、それにもかかわらず人間のこうした活動を可能にする調和手段の慣習的性格は、自然を社会的に占有する可能な方式を無限に変化させる。

5, 社会秩序の安定性、および社会集団の統合。強い感情的絆（近親者との絆だけではない）の発達、個人諸集団の規則的な連合の発達、そして社会的相互作用の独自なパターン（例えば支配の階層構造、労働と消費の分割）の発達は、人間以外の多くの種属、特に霊長類の社会生活の特徴である。人間にとって、長い小児依存期間、二者間の絆形成、および肉体的欲求充足活動の慣習による象徴的・規範的規制のような諸特徴はすべて、長期的な統合性と安定性を示す社会生活様式を前提にしている。すべての文化はこの必要条件を確保するための制度的メカニズムを、少なくとも顔が見える範囲の社会集団のレベルで、備えていることが求められている。

もちろん、すべてについて、より多くの議論と推敲が必要である。それにもかかわらず、人間と他の動物種属の連続性と共通性を承認するという点で自然主義的な、とはいえ依然として人間

の特殊性を同定し解明することができる人間本性論について、少なくともその冒頭の妥当性を示すためには十分なことが語られたと思いたい。分析の出発点は、人間と人間以外の多くの動物の両者に共通する属性と必要条件の認識である。続く特殊人間的なものの特定は、人間だけが有する属性や欲求のさらに特異な部類を同定することによって行われるのではなく、むしろ人間が他の種属と共有する属性や欲求を発現したり充足したりする種属固有の仕方を同定することによって行われる。これは、人間と他の種属のさらなる比較の可能性を残したままにしておいて、社会的な生活様式に関する人間以外の動物の間での多面的な相違を消し去ってしまうことを避けるのである。

この自然主義的人間観の素描は、私が擁護するアプローチが「紙一重の二元論」であるという嫌疑への応答の試みである。私は次のことを示そうと試みた。すなわち、「活動的自然存在」としての他の動物種属との人間の共通性を1つの枠組み——その中で人間の特殊性という見解を分節するための1つの枠組み、として使用することは、人間が他の動物と共有するものが有機的存在という部分だけであると想定するようわれわれに求めないし、文化や意識の観点だけから人間の特殊性を概念化するようわれわれに求めるのでもない。人間は多くの解剖学および心理学的特異性を有しているが、しかし社会生活および精神生活において他の動物種属と多くのものを共有している。

しかしながら、上で見たように、このアプローチが還元主義の一形態——潜在的、相対的に洗練されたものとはいえ——であるとする反論がなお提出されるかもしれない。これへの返答として行ってみる価値があると思われるのは、私のアプローチを2つの他の定着した（しかし広く批判されている）競合的な自然主義から区別することである。これらのうち第1のものは、社会生物学である。ここは、この研究分野を詳細に論ずる場所ではないが、<sup>52</sup>しかし私のアプローチを区別するためには、わずかな紙幅で十分であると思う。社会生物学は、少なくともその古典的定式化においては、動物の社会行動を遺伝的に規定される限りにおいて説明するための仮定された進化メカニズム（血縁淘汰、互恵的利他主義、性淘汰）の小さなレパートリーと共に機能する。その主な問題は、「利他的」行動の存在、または、より一般的には、個体が生き残り子孫を増やす公算を最大化しないように見える社会行動のパターンの存在である。分子としての遺伝子を淘汰圧を受ける究極の単位とすることで、社会生物学者は、観察された「利他的」行動を進化過程の特定の概念と整合させようとする。社会行動の重要な残渣が、とりわけ人間のケースでは、残っており、それは社会生物学的説明の範囲を越える後天的行動として正当化されるなり、排除するなりされなければならないものである。私のアプローチは、動物種属の生活様式に関する動物行動学および生態学的な説明水準<sup>53</sup>を「与えられたもの」として受け取るという意味で非還元主義的である。この説明水準が進化論の特定の見方と整合するようにされるべきであるというアプリアリな要求の代わりに、逆の可能性、すなわち進化論が動物行動学的、生態学的発見を説明するという課題に対応できるようにされるという可能性を開いた状態にしておくのであ

る。

第2の「競合的」自然主義は、物的財の社会的生産様式を人間の他の社会活動を説明するための土台と見なす特定の型の史的唯物論である。このアプローチはその性格において必ずしも還元主義的である必要はないが、しかしこれまでの考察は別の欠点を示唆している。すなわち、「一面性」がそれである。実際、人間本性論についての私の素描は、(第4節以下で)社会的にコーディネートされた自然占有の適切性を十分な自然主義的記述における必要要素として承認している。<sup>54</sup>しかしながら、徹底した自然主義の一含意であるはずの人間/動物対比を体系的に使用することは、史的唯物論の伝統において通常(普遍的にはではないが)十分に理論化されていないところの(セクシュアリティ、生殖、誕生、死、等のような)人間本性についての説明的に重要な他の諸次元を産み出す。一部の最近のフェミニストたちは、史的唯物論におけるこの不均衡を正す、あるいは補正することにおいて大きな前進を成し遂げた。<sup>55</sup>

しかし、最後に、なお次のような主張がなされるかもしれない。すなわち、私の見解は、すべての人間の独自性を、他の動物もすることの表現様式あるいは実行方式の独自性として説明しようとするその企てにおいて還元主義的である。例えば、自己意識的で歴史的な存在に特有であるように見えるあの欲求——自己実現欲求——はどうなのか。これに対する私の応答は、第1に、次のことを繰り返して述べることである。他の多くの動物種属の精神のおよび社会的生活の相対的な洗練と複雑性がいったん十分に認められてしまえば、「共通の欲求を満たす独自の仕方」という決まり文句は、人間の社会生活に対する洞察を大いにもたらすことになるであろうし、それは最初に考えられていた以上に大きなものであろう。

しかし、もちろん、私が擁護する自然主義の形態は、そのような付随的な諸欲求、諸力、諸属性の現実性が否定されるべきであるということを要求してはいない。むしろ、すべきことは、それらを、幾つかの点で自然存在に共通する諸欲求に続いて生じたものとして、共通の諸欲求が満たされる種属特有の仕方に続いて生じたものとして、考察するということである。そのような付随的諸欲求に関する説明戦略は、それらを(存在論的に)より基本的な共通欲求という観点から理解できるようにするということであろう。

私にとっては、これがまさにオープンエンド型の約束手形であるということ以上のことを主張するのは困難であって、私は、多くの読者が現在の状態をもちろん不満に思うであろうことを認める。さしあたり私にとっては、上で擁護された幅広い自然主義的で非還元主義的なアプローチが、幾つかのすでに存在する説明戦略に方法論的防御の端緒(もちろん特定の社会科学的説明を真理として受け入れるための根拠ではない)を提供するであろうことを示唆することで十分であるといわなければならない。資本主義の下での人間の個人的および社会的生活の断片化と歪曲を、自然への病理的関係の(直接的な、または媒介された)帰結として説明するマルクスの企ては、明らかに防御されることになるであろうそのような戦略の1つである。ここで、明白に動物行動学に根ざす社会病理学と比較してみることは興味深く、刺激的であるが、その中でもデズモ



ンド・モリスの *Human Zoo*<sup>56</sup> が、おそらく最も有名な例である。

そのような社会学的／人類学的戦略は、人間個人のレベルで機能する精神分析的アプローチと比較され、これによって補完されるのが有益であろう。フロイトが「昇華」という概念で行ったことは、幾つかの特殊人間の活動（例えば審美的活動や科学的活動）が、われわれが他の種属と共有する欲求や傾向（セクシュアリティや情動性）に根ざすものであることを非還元主義的手法で説明しようとする企ての明確な一事例である。最後に、系統発生論的説明のレベルで、S. J. ゲールド<sup>57</sup> や他の人々は、人間的諸力および潜在力の特殊性と独自性をまったく否定することなく、どのように自然淘汰の概念が人間の起源の説明において（他の種属の場合と同様に）使用されるのかを示した。適応的な生物学上の一時的変異がその結果として進化論の観点からは非適応的な一連の諸結果をもたらすかもしれないという考え、これが、この戦略にとって1つの重要なコンセプトなのである。

（※訳注）本稿はグリーン・ソーシャリズムの代表的思想家である Ted Benton の主著 *Natural Relations: Ecology, Animal Rights and Social Justice*, London: Verso, 1993, の第2章 ‘Marx on Humans and Animals: Humanism or Naturalism’ を訳出したものである。

#### 原注

- 1 本章には次の論文を若干修正しつつ組み入れている。‘Humanism = Speciesism?’, *Radical Philosophy*, 50, Autumn 1988, pp. 4-18, reprinted in S. Sayers and P. Osborne, eds., *Socialism, Feminism and Philosophy*, London and New York 1990, pp. 235-74. 初期の草稿への有益な批評に対し、Jean Duncombe, Jean Grimshaw, Roy Edgley, Joe McCarney, Lisa Hooper, Chris Arthur, Oriel Sullivan に感謝する。また、Tim Hayward と Howard Feather からは特に詳細で刺激的なコメントを頂いた。謝意を表したい。サセックス大学での社会学セミナーの参加者、イースト・アングリア大学での政治哲学セミナーとそれに続くリアリズムと人文科学学会の参加者、および、エセックス大学の学生諸氏は本章の議論に有益なコメントを加えてくれたが、多くは本章に組み入れられている。最後に、この話題についての多くの刺激的な議論に対して Steve Horgan と Nick Bunnin に深謝する。
- 2 マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登／田中吉六訳、岩波文庫、1964年、94-95ページ。この見解についての重要な論評とこの見解の展開については A. Collier, ‘The Inorganic Body and the Ambiguity of Freedom’, *Radical Philosophy*, 57, Spring 1991, pp. 3-9, を参照。
- 3 G. A. Cohen, *Karl Marx's Theory of History: A Defence*, Oxford 1979. 特に 201-7 ページと 322-25 ページ参照。
- 4 人間解放と自然との関係に関するマルクスの「成熟した」見解について、私は次の2つの論文の中でもっと多くのことを述べている。‘Marxism and Natural Limits’, *New Left Review*, 178, Nov/Dec. 1989, pp. 51-86. ‘Ecology, Socialism and the Mastery of Nature: A Reply to Reiner Grundmann’, *New Left Review*, 194, July/August 1992, pp. 55-74.
- 5 マルクス『経済学・哲学草稿』前掲、93-94ページ。初期マルクスの作品に関する二次文献はもちろん膨大な量に上るが、特に以下のものを参照。C. J. Arthur, *Dialectics of Labour*, Oxford 1986; S. Cornu, *The Origins of Marxian Thought*, Springfield, Illinois 1957; G. Markus, *Marxism and Anthropology*, Assen 1978; R. Norman and S. Sayers, *Hegel, Marx and Dialectic*, Brighton 1980; B. Ollman, *Alienation*, Cambridge



1971; and A. Wood, *Karl Marx*, London 1981. N. Geras の *Marx and Human Nature: Refutation of a Legend*, London 1983, は、後期マルクスの人間本性論についての重要な典拠である。序でに言えば、ほとんどすべての論評がマルクスの人間と動物との対比に言及しているが、この論点に批判的に注目し続けているものはほとんどない。例外は J. Elster の *Making Sense of Marx*, Cambridge 1985, と G. Markus の *Marxism and Anthropology* である。Peter Dickens は、ごく最近の作品 (*Society and Nature. Towards a Green Social Theory*, Hemel Hempstead 1992) の中で、本稿が支持するアプローチと大いに共通する仕方マルクスの初期『草稿』の哲学的枠組みを環境社会理論のための基礎として使用している。

- 6 マルクス『経済学・哲学草稿』同上, 95 ページ。
- 7 同上, 90 ページ。
- 8 同上, 139-140 ページ。
- 9 同上, 96 ページ。
- 10 同上, 95 ページ。
- 11 同上, 97 ページ。
- 12 同上, 147 ページ。
- 13 同上, 142-143 ページ。
- 14 同上, 132 ページ。
- 15 同上, 149 ページ。
- 16 同上, 144 ページ。
- 17 同上, 138 ページ。
- 18 同上, 139 ページ。
- 19 同上, 131 ページ。
- 20 同上, 143 ページ。
- 21 同上, 96 ページ。
- 22 同上, 140 ページ。
- 23 同上, 92 ページ。
- 24 同上, 25 ページ。
- 25 生物学的決定論をめぐる論争への有益な入門書としては, A. L. Caplan, ed., *The Sociobiology Debate*, New York 1978, が挙げられる。多くの有力な批評があるが、最も辛辣なものの中で定評のあるものとしては, M. Sahlin, *The Use and Abuse of Biology*, London 1977; S. Rose, ed., *Against Biological Determinism*, London 1982; および S. Rose, L. Kamin and R. C. Lewontin, *Not In Our Genes*, Harmondsworth 1984, がある。フェミニストの観点は, J. Sayers, *Biological Politics: Feminist and Anti-Feminist Perspectives*, London 1981; および L. Birke, *Women, Feminism and Biology*, Brighton 1986, に見ることができる。
- 26 『マルクス=エンゲルス全集第40巻』大月書店, 1975年, 86 ページ。
- 27 H. E. Gruber, *Darwin on Man*, London 1974, p. 290.
- 28 「マルクスからエンゲルス (在マンチェスター) へ, 1860年12月9日」『マルクス=エンゲルス全集第30巻』大月書店, 1972年, 105 ページ。「これは、大ざっぱに英語で述べられたものだとはいえ、われわれの見解のための博物学的な基礎を含んでいる本だ。」
- 29 文化的伝達についての最も素晴らしい証拠の幾つかは、タンザニアのゴンベの野生チンパンジーのコロニーを25年以上観察している Jane Goodall と彼女の同僚からのものである (J. Goodall, *In the Shadow of Man*, Glasgow 1974 および *The Chimpanzees of Gombe: Patterns of Behaviour*, Harvard 1986, 参照)。チンパンジーがアリ塚からシロアリを「釣る」ための「道具」として小枝を使用しているところがしばしば観察されている。チンパンジーはまず小枝を使用目的に合わせるために葉を取り除くが、子供は大人を観察したり真似たりすることで適切なスキルを獲得する。とはいえ、Goodall の解釈についての S. J. Gould の興味深い議論を参照されたい (S. J. Gould, Review of J. Goodall (1986) and other texts in *New York Review of Books*, 25 June 1987, pp. 20-25)。

- 30 最近の研究は、人間の言語能力の特殊性に疑問を投げかけている。捕らわれたチンパンジーや他の霊長類に会話を教え込もうとする以前の試みはうまくいかなかったが、R. A. Gardner と B. T. Gardner は、チンパンジーの Washoe に手話を教えることをある程度までなんとかやり遂げた。E. Linden の人工的記号を用いた実験も、幾つかの霊長類における言語習得のための知的能力の証拠として挙げられている。もちろん、言語習得の真正の事例としてこれらを排除するように言語を定義することはできるし、このような実験はすべて方法論的な弱さを持っている。それにもかかわらず、推論と記号使用の点で、人間と他の霊長類の連続性がこれまで広く考えられてきたよりも遥かに大きいという確信を持つことなしに、この文献を読むことはできない。R. A. and B. T. Gardner, 'Early Signs of Language in Child and Chimpanzee', in *Science*, vol. 187, pp. 752-3, および E. Linden, *Apes, Men and Language*, Harmondsworth 1976, を参照。この論争についてのバランスのとれた良い記述を S. Walker, *Animal Thought*, London 1983, chs. 9 and 10, で読むことができる。
- 31 例えば, Midgley, *Beast and Man*, ch. 2, 参照。
- 32 上記注 29 参照。
- 33 もちろんこれは、善き生と潜在力の実現との間に諸関係があることを否定することではない。マルクスは潜在力を実現するための機会が人間にとって1つの欲求であることを主張した点で正しかったと私は考える。これにより潜在力の実現は善き生の必要要素であるということになる。しかし、すべての潜在力が個人的人間生活の時間幅の内部で、あるいは特定の文化のコンテキストの内部で、実現されうるわけではない。幾つかの潜在力はまったく実現されないまま留まらざるをえない。さらに、先に示唆したように、幾つかの人間の潜在力の実現は望ましくないものであろう。他の場合においては、2つの対照的な潜在力が同時に実現されることは、不可能であるか、あるいは望ましくないかもしれない。どちらかが別々に実現されることについては何の問題もないであろうとしても。こうした考察は、善き生についての擁護可能な見解を確立するためには、人間的潜在力と類的存在の概念はそれだけでは不十分である、ということを示している。善き社会は幾つかの潜在力の実現を奨励し、他の潜在力の実現を阻止するであろう。その社会の制度的枠組みは、市民の中の様々な領域の潜在力の実現のための条件を与えることを含むであろうが、この領域に対する限界を設定し、望ましくない潜在力の実現に制約を設けるであろう。さらなる倫理的諸原則と推論が、そのような社会のアウトラインを設定し擁護するために必要とされている。人間本性についての理論が、人間の善き生についての見解の合理的基礎付けの本質的部分であるが、それは適切な道徳理論の代わりとはなりえない。
- 34 上記注 25 の参考文献を参照されたい。また、これらの悪用はもちろん、フェミニストの分析に対して特別な諸問題を提出している。R. A. Sydie, *Natural Women, Cultured Men*, Milton Keynes 1987; A. M. Jaggar, *Feminist Politics and Human Nature*, Brighton 1983; C. MacCormack and M. Strathern, eds., *Nature, Culture and Gender*, Cambridge 1980, および V. Plumwood, 'Women, Humanity and Nature', in Sayers and Osborne, ch. 10, を参照。
- 35 私は別のところで、ダーウィンに対するマルクスの、そして特にエンゲルスの後期の反応に関して論評している。T. Benton, 'Natural Science and Cultural Struggles: Engels on Philosophy and the Natural Sciences', in J. Mepham and D.-H. Ruben, eds., *Issues in Marxist Philosophy*, vol. 2, Brighton 1979, 参照。
- 36 マルクス『経済学・哲学草稿』前掲, 140 ページ。
- 37 こうした理解の発達の立役者は、後期 T. McKeown (*The Role of Medicine*, Oxford 1984) である。また、S. Rose, ed., *Against Biological Determinism* 中の L. Rogers と G. Bignami の論文、および L. Doyal (with I. Pennell), *Political Economy of Health*, London 1979, も参照。
- 38 いくぶん逆説的ではあるが、こうした欲求論の重要な典拠は H. A. マズローの作品である (Maslow, 'A Theory of Human Motivation', *Psychological Review*, London 1943, pp. 370-96, および *Motivation and Personality*, New York, Evanston and London, 2nd edn., 1970, 参照)。マズローは「全体論的」で反二元論的な人間本性論を支持しているにもかかわらず、彼の欲求の階層分類 (生理学的欲求, 安全の欲求, 愛の欲求, 承認の欲求, 自己実現の欲求) は、事実上、「下等な」欲求と「高等な」欲求という二元論を復活さ

- せるような解釈の余地を残している。本書での私の議論と直接関係する欲求概念についての最近の重要な論考は、K. Soper, *On Human Needs*, Brighton 1981 および L. Doyal and I. Gough, *A Theory of Human Need*, Basingstoke 1991 である。
- 39 これに関する文献への極めて便利な入門書は、M. Redclift, *Development and the Environmental Crisis*, London 1984 である。また、D. Goodman and M. Redclift, *Refashioning Nature: Food, Ecology and Culture*, London and New York 1991, も参照。
- 40 『草稿』206 ページ。
- 41 『草稿』208 ページ。
- 42 上記注 30 参照。
- 43 『草稿』144 ページ。
- 44 『草稿』94 ページ。
- 45 『草稿』96 ページ。
- 46 C. Levi-Strauss, *The Raw and the Cooked*, London 1970 および M. Douglas, *Purity and Danger*, London and New York 1984, 参照。
- 47 次の拙稿参照。T. Benton, 'Biological Ideas and their Cultural Uses', in S. C. Brown, ed., *Objectivity and Cultural Divergence*, Cambridge 1984, pp. 111-33.
- 48 次の書所収の諸論文参照。B. R. Wilson, ed., *Rationality*, Oxford 1970. 特に、S. Lukes, 'Some Problems about Rationality' (pp. 194-213), および、M. Hollis 'The Limits of Irrationality' (pp. 214-220), 参照。また、M. Hollis and S. Lukes, ed., *Rationality and Relativism*, Oxford 1982, の諸所、しかし特に、W. Newton-Smith, 'Relativism and the Possibility of Interpretation' (pp. 106-22), と、R. Horton, 'Tradition and Modernity Revisited' (pp. 201-66), を参照。Roger Trigg, *Understanding Social Science*, Oxford 1985, ch. 4, も参照。
- 49 このアプローチは M. フーコーの作品に体现されている。特に次の2つの著書を参照。M. Foucault, *Discipline and Punish*, Harmondsworth 1977, *The History of Sexuality*, vol. 1, Harmondsworth 1981. フーコーへの有益な批判的応答は、P. Dews, *Logics of Disintegration*, London and New York 1987 の5-7章と結論に含まれている。
- 50 可鍛性の限界については、R. Lichtman, 'The Production of Human Nature by Means of Human Nature', とこれに続く *Capitalism, Nature, Socialism*, 4, June 1990 中の議論を参照。また、A. Collier, 'Scientific Socialism and the Question of Socialist Values', in J. Mephram and D.-H. Ruben, eds., *Issues in Marxist Philosophy*, vol. 4, Brighton 1981, esp. pp. 5-13, も参照。
- 51 J. Z. Young, *An Introduction to the Study of Man*, Oxford 1971, esp. ch. 34, section 7, pp. 482 ff, 参照。
- 52 上記注 25 の文献参照。
- 53 次の文献参照。R. A. Hinde, *Ethology*, Glasgow 1982, and *Individuals, Relationships and Culture*, Cambridge 1987; W. H. Thorpe, *Animal Nature and Human Nature*, London 1974. また、R. H. Hinde, 'A Biologist Looks at Anthropology', *Man*, 26, pp. 583-608 参照。
- 54 人間本性に含まれるかなり明白な一側面であると人は思うかもしれない。しかしこれは、P. Winch の 'Understanding a Primitive Society' (in B. Wilson, ed., *Rationality*, pp. 78-111) 中の誕生、性、死という Winch's trilogy から抜けていることに注意されたい。
- 55 例えば次の文献参照。N. Hartsock, *Money, Sex and Power*, Boston 1984 (また、S. Harding and M. Hintikka, eds., *Discovering Reality: Feminist Perspectives on Epistemology, Metaphysics, Methodology and Philosophy of Science*, Dordrecht 1983, 中の Hartsock の論文も参照)。
- 56 D. Morris, *Human Zoo*, New York 1970.
- 57 S. J. Gould, *Ever Since Darwin*, Harmondsworth 1980, ch. 32.